

77-381

文學士幸田成友校訂  
文學士木寺柳次郎編纂

訂改  
西  
洋  
史  
要

東京 水野書店發行

明治  
37 3 14  
丙午

## 凡例

一本書は中學校及之と同程度の諸學校に於ける西洋歴史教科用書たらしめんとの目的を以て編纂せり

一本書叙述の順序は中學校教授要目を標準とし、まゝ編者の意見によりて變更を加へ文章は平易なるべきに注意し又項目を省かずして紙數は實際の授業時數に適當たらしめんことを務めたり

一西洋歴史と東洋歴史とは相俟ちて茲に完全なる世界歴史を成す故に本書は改訂東洋史要との聯絡を保たんことを務めたり

一諸外國地名人名及其他固有名詞の發音及記載法は文部省の

取調報告にれるも、まゝ普通に行はるゝ稱呼に従ひしもあり  
 されば本書の最終に附録として其原語を示せり  
 一年代は總て西洋紀元に據れり  
 一別冊に輯録したる地圖、年表及其他の諸表は、教授上適宜の機  
 會に際し必ず生徒をして参照せしめられんことを希望す

明治三十六年十月

編者識

訂改西洋史要目次

第一編 上古史

第一期 東方諸國及ギリシア

第一章	エジプト	一
第二章	ヘブライ、フェニキア	三
第三章	バビロニア、アッシリア	七
第四章	メデア、リヂア、ペルシア	九
第五章	ギリシアの古代	二二
第六章	ペルシア戦争	一八
第七章	アテネの隆盛、ギリシアの文物	二〇
第八章	スバルタ及テーベの覇業	二三

第九章 マケドニアの興廢 アレクサール

ドルの業……………二七

第二期 ローマ

第一章 地中海沿岸の諸國……………三一

第二章 ローマのイタリヤ統一……………三五

第三章 ポエニ役……………三八

第四章 ローマの版圖……………四〇

第五章 内亂時代……………四三

第六章 帝政の初期……………五〇

第七章 キリスト教の蔓延……………五四

第二編 中古史

第一期 種族の遷徙よりベルダン條約まで

第一章 種族の遷徙……………五七

第二章 東ローマ ムルシア サラケン……………六二

第三章 東ヨーロッパと西ヨーロッパ カロ  
ロ大帝の業……………六八

第二期 ベルダン條約より大空位時代まで

第一章 ノルマンの横行……………七三

第二章 神聖ローマ帝國 法王の威權  
大憲章……………七六

第三章 十字軍と東方諸國……………八一

第四章 西ヨーロッパ諸國の内情……………八七

第五章 東ヨーロッパ諸國 蒙古の入寇……………九一

第三期 大空位時代より宗教改革まで

第一章 イギリスとフランスとの交渉……………九五

第二章 古學の復興、活版の發明、兵制の變遷……………一〇〇

第三章 地理上の發見……………一〇四

第四章 西ヨーロッパ諸國の中央集權……………一〇七

第五章 宗教の頽廢……………一一〇

第六章 オスマンリトルコの跋扈 北ヨーロッパ諸國……………一二三

### 第三編 近古史

#### 第一期 宗教改革よりウエストファリア條約まで

第一章 宗教改革……………一二七

第二章 イスパニアとフランスとの對抗……………一二一

第三章 シマルカルデン戦争 宗教改革の反動……………一二六

第四章 ポルトガル イスパニアの殖民政略……………一三〇

第五章 オランダの獨立……………一三四

第六章 イギリスのナードル朝……………一三七

第七章 フランス宗派の争……………一四一

第八章 三十年戦争……………一四四

第二期 ウェストファリア條約よりフランス革命まで

第一章 フランス國家主義の確立及外國侵略……………一四八

第二章 イギリスの革命……………一五三

第三章 イスパニア継承の争……………一五七

第四章 北ヨーロッパ諸國の盛衰…北ヨーロッパ戦争……………一六一

第五章 プロシアの勃興 オーストリア継承の役 七年戦役……………一六六

第六章 イギリス、フランスの殖民政策……………一七一

第七章 ロシアの外交及拓殖 ポーランドの滅亡……………一七五

第八章 北アメリカ合衆國の獨立……………一八〇

第九章 十八世紀の情勢及文化……………一八三

第四編 近世史

第一期 フランス革命よりウィーン條約まで……………

第一章 フランス革命の初期……………一八八

第二章 恐怖時代……………一九二

第三章 佛國革命の末期……………一九五

第四章 ナポレオン一世の覇業……………二〇一

第五章 ヨーロッパ獨立戦役 ウィーン列國會議 イギリス殖民地の擴張……………二〇五

第二期 ウィーン會議より今日まで

第一章 ヨーロッパ亂後の國情……………二一〇

第二章 アメリカ諸國及ギリシアの獨立……………二二三

第三章 七月革命及其影響 イギリスの政黨政治……………二二八

第四章 關稅同盟 東方問題 四國同盟……………二三三

第五章 二月革命及其影響……………二三七

第六章 革命の鎮壓……………二四一

第七章	クリム戦争 東アジアの形勢……………	二三四
第八章	イタリアの統一……………	二四〇
第九章	南北戦争 メキシコとフランスとの交渉……………	二四三
第十章	シッレスウイヒ・ホルスタイン問題 プロシヤ、オーストリアの戦争……………	二四六
第十一章	ドイツ、フランスの確執 ドイツの統一……………	二五〇
第十二章	ロシア、トルコ戦争……………	二五五
第十三章	最近事件……………	二五八
第十四章	十九世紀の文化……………	二六五
附 録	原語表……………	

訂改 西洋史要目次終

訂改 西洋史要

文學士 木寺柳次郎編

第一編 上古史

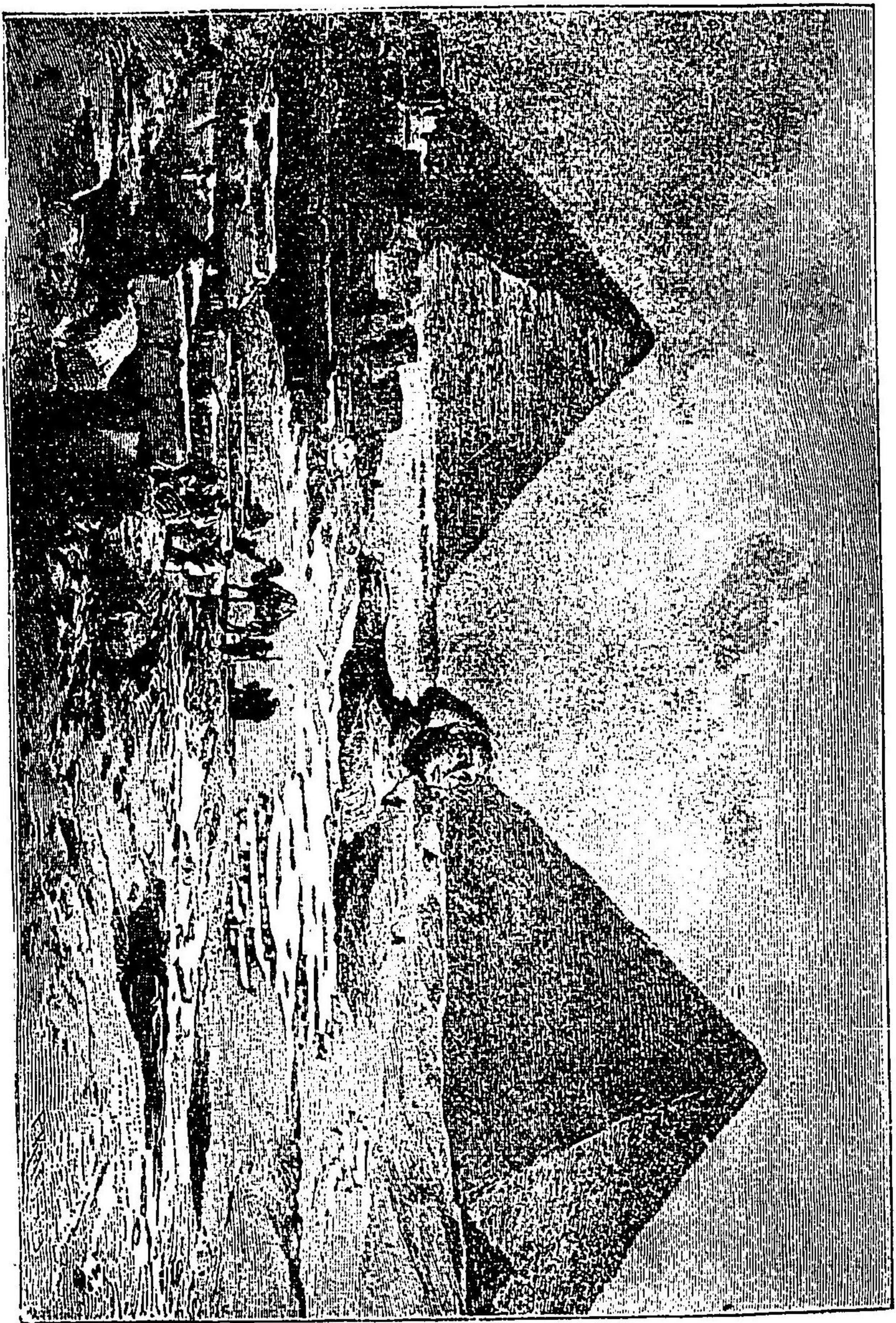
第一期 東方諸國及ギリシヤ

第一章 エジプト

地勢 エジプトは世界史上最古國の一にして其の建國は今を距る五千年前にありと云ふ、かくエジプトが夙に文明の曙光を放てるは氣候の炎熱なるとニール河の毎歲一定の時期に漲溢し河畔の地を肥沃ならしむるとにより諸穀大に熟し人民の生活極めて容易なりしに基く。

金字塔

沿革 エジプト人はハム派に屬す傳説によればエジプト  
創建の王をメネスと云ひ、メンフィスに都せしが其の後國境  
を南方に擴張し首府を、テーベに徙しぬ、今日メンフィス附  
近に存在せる幾多の金字塔は實に此間に成り、もと國王の  
墳墓として用ゐられしものなりといふ。  
紀元前二一〇〇年頃ヒクソスと稱する遊牧の人民シリア  
より來りエジプトを征服せしがアアムス一世これを國外  
に逐へり、後セソス一世ラメス二世等の英主出て内は頻に  
土木を起し、外は屢兵を北東に用ゐ、その治域はバレスチナ、  
シリアを越えてメソポタミアに達するに至れり。  
文化 エジプト人は最も建築の術に長じ金字塔、方尖碑、螺旋  
旋堂等は皆雄壯宏大を以て顯はる、文字にはハイログリフ



塔字金のーセギ



文字  
曆法

木乃伊

と稱する象形文字あり、數學、天文學、醫學も亦頗る發達し其の創定にかかる曆法は後世ユリウス曆となりて諸文明國の襲用する所となれり。

エジプト人は天然の諸力殊に太陽を尊信し國王を以て太陽の子孫とし之をファラオと稱せり、從て僧侶は國人中最高の階級に居り武士、平民之に次ぐ又國人は固く靈魂の不滅を信じ藥術を施して屍體の腐敗を止め之を永遠に保存するの風ありき。

## 第二章　ヘブライ　フェニキア

ヘブライ人の轉遷　ヘブライ人はもと北部メソポタミアに遊牧せしが、アブラハムの時パレスチナに移り更にエ

シプトに轉ぜり、然るに紀元前十四世紀の半頃エジプト王  
ラメス二世の虐遇に堪へずモーセは其の族人を率ゐてエ  
ジプトを脱し神意に従ひてパレスナナに向へり。

### 士師時代

モーセ歿してヨシフ之に代りパレスナナに

侵入し各地の異教徒を征服して其の地に建國す是を士師  
時代の發端となす、當時は民俗一神教を奉ずること篤く祭  
政一致の政體なりしが内訌止まざりしかば紀元前一〇五  
五年國人政體を變じて王政となせり。

### 王政時代

第二代の王ダビデは國都をイェルサレムに奠

め、ダマスクを陥れて巨額の貨財を獲たり子ソロモン聰明  
にして益々王威を振張し、ナルと通じて商業の隆盛を計れり  
之をヘブライ人極盛の時代とす、然るに王の歿後内亂起り

ダビデ  
ソロモン

てイスラエル、ユダヤの二王國に分裂し互に雄を争ひて國  
勢大に衰へたり。

ユダヤ教

要するにヘブライ人は政治上著き影響を後世に及すこと  
なかりしと雖も其の尊奉せるユダヤ教は實に一神教の嚆  
矢にして、キリスト教、回教の如きは皆之に胚胎せるもの  
なり。

### フェニキアの政體

フェニキアはパレスナナの北西にあり

曾て一統の國家をなしたることなく幾多の市府は各世襲  
の君主を戴きて相聯合しシドン、ナルの二府最も名ありき  
紀元前一〇〇〇年以後三百年間は此國極盛の時代にして  
繁榮多く其の比を見ざりき。

### 通商及殖民

フェニキア人の通商は海陸共に大に發達せ

區域

り但し陸上に於てはアラビア、メソポタミア、アルメニアの三方面に隊商を送るに過ぎざりしが海上に於ては其の區域極めて廣く地中海を航して其沿岸諸國と貿易を營みしのみならず、遠くジブラルタルを過ぎて大西洋に出で今のイギリス、オランダ、ドイツの沿岸地方に往來し而して其の殖民地は地中海の海濱及諸島岸到る處としてあらざるはなく商業の發達、智識の傳播に大功ありき。

音字の發明　　玻璃及紫色染料は此民族の製造品として著名なるが就中音字の發明は後世に影響する所頗る多く、歐洲諸國の文字は皆是より出でたり。

### 第三章　バビロニア　アッシリア

バビロン

バビロニア　エジプトに於けるニール河畔の如くテグリス、エウフラト兩河の水域も亦夙に獨立の文明を開き紀元前二〇〇〇年頃シム派に屬せるカルデア人は土着の非シム派人民を服してバビロニア、一にカルデアを建てバビロンに都しき。

アッシリアの強大

アッシリア　アッシリアはもとバビロニアの一殖民地なりしが後叛きて獨立し都をニヌアに定め紀元前一二五〇年遂に之を滅せり爾後アッシリアの國威日に揚り紀元前八世紀より七世紀に亘りてはチグラト・ピレサル二世サルゴン等の英主並び起り頻に兵を出して境域を擴めバビロニア、フェニキア、イスラエル、ユダヤ等は云ふに及ばず、リヂア、エジプト、キプロス等に至るまで或は滅び或は入貢しアッシリア

ア王は王中の王と稱せられたり已にしてメデア及リヂアの二國アッシリアの東西に興りて其の後を窺ひ又バビロニアの大守ナボポラサルは今のカフカズ地方より南下し來れるスキタ人を撃退したる後メデアと結びてアッシリアを攻め紀元前六〇六年遂にニヌアを陥れたり。

新バビロニア　かくてナボポラサルは悉くチグリス河以西の地を收めバビロンに都して國を新バビロニアと稱せしが次王ネブカドネザルに至り更に兵を用ゐて、エジプトを破りユダヤを滅し又フェニキアを服しぬ。

文化　以上の三國は人種、政體、宗教、言語等大概相同じ即ち政體は君主獨裁にして壓制を極め、宗教は多神教にして天體を拜するの風あり従ひて僧侶は日月星辰の觀測に長

じ其の精確なること驚くに堪へたり、文字は所謂楔形文字を用ふ農業工業は大に發達し、建築彫刻の二術はネブカドネザルの獎勵を得て著き進歩を爲せり。

#### 第四章　メデア　リヂア　ペルシア

メデア　メデア人は裏海の南岸に國し、もとアッシリアに服屬せしが紀元前七世紀の半頃に至り獨立を企て、キヤクサレス王出づるに及びバビロニアと通じてアッシリアを滅しき。

リヂア　リヂア人は小亞細亞の西部に國しメデアと等しくアッシリアの屬國たりしが、ギゲス王出づるに至りエジプト王と共にアッシリアの羈絆を脱しぬ、かくアッシリア王國

瓦解して新バビロニア、メデア、リヂア、エジプトの四國相對立し互に雄を争ひしが、ペルシアの東方に崛起するに及び皆其の併呑する所となれり。

リヂア、バビロニア滅ぶ

ペルシアの勃興　ペルシアは嘗てメデアの屬領たりしが紀元前六世紀の頃太守キロス自立して王となり、スーサに都し先づ、メデアを滅し尋で兵をリヂアに進めたり、因てリヂアはバビロニア及びエジプトと同盟し更に救をギリシア諸市に求めたりしも機已に失し紀元前五四六年國都サルデス陥り其の後八年にしてバビロンも亦ペルシアの手に落ちぬ、已にしてキロスは北方のスキタ人を伐ちて陣中に歿し其の子カンビセス嗣ぎ紀元前五二五年親しくエジプトを征して殘暴を極めたりしが歸國の途次シリア

105 11

ダリオス

ペルシアの版圖

に歿し内亂各地に蜂起せり、王族ダリオス叛徒を平げて王位に即き外は遠く兵をインドに出し、内は施政の改良を圖り王國統一の基礎を確立せり。

ダリオスの治績　今やペルシア王國の版圖は東はインドス河邊より西は地中海に至り北はカスピ海及黒海より南はエジプトを含みてペルシア灣に沿ひ其の面積は今日の歐洲の一半より大なりき、ダリオスは之を二十州に分ち各州に知事、將軍を置き且つ密に巡檢使を派して中央政府の耳目となし其他孔道を開き驛傳を設け貨幣を一定する等務めて中央集權の策を講ぜしと雖も各地の法律と宗教とは其の舊慣に従はしめたり。

宗教　此國固有の宗教をゾラツストラ教といふ、バクト

リアの賢人ザラツストラの唱道せし所にして其の經典を  
アベスタといふ其の他メヂアの拜火教も亦行はれ、マジ  
と稱する世襲の僧侶ありて之が禮拜を司りぬ。

### 第五章 ギリシアの古代

**地勢** ギリシアは歐洲南部三大半島中、東端に位し東南、西  
三面は海に臨み就中東岸は港灣、島嶼極めて多く又内地は  
山脈縦横に走る故にギリシア人は夙に東方諸國と交通を  
開きて其の文物を輸入し小邦各地に割據して獨立自由の  
氣風を養へり。

**ギリシアの國初** ギリシア人は自らヘレネスと稱し土  
着のペラスギを逐ひて此地に據れる者なり、分れてドリ  
ア、

#### 四部族

イオニア、アカイア、エオリアの四部族となり國中到る所に  
獨立の小王國あり、世襲の國王を戴き其の下に貴族の公會  
と人民の集會とありて政務を輔け而して一旦外患あるに  
方りては同志の諸國相合して最強國の指揮に従ふを常と  
しき。

**ドリア人の南下** 紀元前一〇〇〇年頃ドリア人はペロ  
ポネソス半島に南下し、アカイア人を逐ひてラユニア州に  
據れり因てアカイア人は半島の北部に逃れて其の地のイ  
オニア人を驅逐し、イオニア人は全く中央ギリシアに移り  
てアナカ州を本據となせり是れ他日ドリア人の大に、スバ  
ルタに起りイオニア人の、アテネに起りて覇を南北に唱へ  
し所以なり。

共和政治の  
種類

列國政體の一變　ギリシアは早くより數多の小國王に分れたりしが後概ね王政を罷めて共和政治を行へり共和政治に二あり、少數貴族の政權を專にするを貴族政治と云ひ全國の公民皆國政に參與するを民主政治と云ふ、而して貴族公民の一國內に於て相衝突するに當り大政治家の巧に民心を收攬して政治の全權を握るを僭主政治と云ふ僭主なる名稱は必しも虐主の義にあらざりしなり。

スパルタの國風　スパルタがペロポネソス半島の牛耳を執るに至りしは、リユルゴスの憲法による、憲法によれば上に二人の王あれども政治の實權は元老院と民會とに存し殊に毎歲民會にて選べる五人の監督官は權力甚だ大なり、加ふるに異族征服の結果として人民は三階級に分れて

元老院  
民會

リユルゴスの  
訓練法

民會に與るは純粹なる、スパルタ人即ち征服者に限りしを以てスパルタは名は王國なりと雖も實は貴族政治の變體なりと云ふべし。

リユルゴスは嚴酷なる法律を定めて公民を訓練せり即ち政府は羸弱なる生兒を棄てしめ男兒は七歳に至れば皆公立の營舎に入れて専ら武技を授け且つ務めて飢渴、寒暑を忍ぶの力を養はしめ成人の後も六十歳に至るまでは常に兵營に起臥飲食せしめたり女子の教育も亦専ら其體の鍛鍊と婦徳の涵養とに力を用ゐる男女共みだりに市外に出づるを禁ぜり。

是に於てか、スパルタは國威日に振ひ紀元前七世紀の半頃メセニアを滅し同六世紀の半頃アルゴスを服し全くペロ

ペロポネ  
スの覇權を  
握る

ポネソスの覇權を握り將にコリント海峡を渡りて威を中  
部ギリシアに張らんとせり。

アテネの政體 アテネは初め王政なりしが後之を廢し  
王族中より一人の統領を選びて終身在職せしめしも後人  
員を増して九名とし年限を減じて一年とし悉く貴族より  
選ぶことよせしかばアテネは純然たる貴族政治となり、平  
民の不平甚しく紀元前六二〇年頃統領ドラコン法典を編  
纂して騷擾を治めんとせしも法文峻嚴に過ぎて其の功を  
見る能はざりき。

ソロンの憲法 ソロン選ばれて統領となるに及び紀元  
前五九四年新憲法を制定して貴族平民間を調和せんとし  
不動産の多寡に従ひて人民を四級に分ち下院と上院とを

クリステネ

設け前者には各級の人民をして出席するを得しめ後者に  
は第三級以上の人民をして出席議員を選ばしめ統領と元  
老院議員とのみを第一級人民の専有となせり、其の他負債  
者の負債を返還し能はざる者を奴隸と爲すを禁じ又新錢  
を鑄造して負債者の償却に便にせり、然れども猶未だ全く  
貴族平民間の黨争を解く能はざりしかば僭主などの起り  
しこともありき。

### 民主政治の完成

是に於てか、クリステネ立ちて統  
領の權力を殺ぎ公民の四階級を廢し、上院の制を改め抽籤  
法により五百人の議員を出さしめ、又オストラシズムと稱  
する秘密投票法を設け僭主の再興を防げり時に紀元前五  
〇九年にしてアテネは是より全く民主國となりぬ。



第七章 ペルシア戦争

小アジアの動搖 ペルシアの、リダアを滅しエジプトを服するに及び是等三國と交通して繁榮を極めたりし小アジアのギリシア殖民地も亦ペルシアに降りき然るに紀元前五〇〇年ミレトスの僭主、アリスタゴラス、イオニア諸市を煽動して反亂を企て且つアテネ及エレントリア兩市の援助を得てサルヂスを陥れたりペルシア王ダリオス大に怒り六年を費して悉く小アジアを定め更に兵を出して怨をアテネ及エレントリアに報ぜんと欲せり是をペルシア戦争の原因とす。

ペルシア戦争の原因

ダリオスの侵西 ダリオスは紀元前四九二年第一回の

マラトンの戦

遠征軍を送りしに陸軍は途に敗れ、海軍は颶風に遇ひて空しく返國せしかば更に復大軍を出しエーゲ海の南部を渡りてエウボイア島に向はしめ大勝を得てアチカに上陸せしが、アテネの將ミルナアデスの爲にマラトンの野に逆撃せられて大敗を蒙りぬ時に紀元前四九〇年なり。此後アテネには、テミストクレス、アリスナデスの二傑出で共にペルシアの再侵を慮りて防禦の策を講ぜしが遂にテミストクレスの説に従ひ大に海軍を擴張せり。クセルクセスの西侵 ダリオスの子クセルクセスは父王の遺志を紹ぎ紀元前四八〇年親ら水陸の軍を率ゐてギリシアに侵入せり是に於てギリシア列邦はスバルタを盟主として之に當り、スバルタ王レナニダスはテルモビレの

テルモビレの戦

サラミスの戦

險に據りて敵を支ふることを數日なりしが衆寡敵せずして敗死しヘルシア軍は勝に乗じてアテネを焼けり、是より先きたミストクレスはアテネ市民に説き市を棄てて悉く船に上らしめ又同盟國將校が退却を主張せるを排し遂にヘルシアの海軍とサラミス灣に激戦して大に之を破り、クセルクセスをして奔りて本國に歸らしめたり。翌年ギリシアの陸軍は更にヘルシアの殘兵をプラチエに粉碎し海軍も之と同時に、ミカンに於て大勝を收めたり。

第八章 アテネの隆盛 ギリシアの文物

テロス同盟 戦後ギリシアの諸邦は猶ヘルシアの侵寇を

アテネの隆盛

慮り各自船艦又は貨財を出しエーゲ海中の一島テロスのアポロ神社に集め、アテネをして其管理者たらしめたり。是をテロス同盟と云ふ時にアテネはアリスナデス政を執り憲法を改め海軍を盛にし其の將キモンは同盟諸邦の兵を督して、ヘルシア人をトラキア及エウリメドンに破り小アジアのギリシア諸市はヘルシアの羈絆を脱するを得たり。ペリクレス時代 アテネの隆盛は他邦の嫉妬を買ひ殊に貴族主義の諸邦は皆スパルタを仰ぎて之に抗したりしが、ペリクレス出づるに及び優に其の大勢を挽回せり、ペリクレスは稀世の大政治家にしてアテネの政權を握ること十餘年の久しきに至り内は文學技藝を奨励し、外は海軍を擴張し紀元前四四五年スパルタと三十年間の休戦條約

を結びアテネは實に世界第一の大都となりぬペリクレス時代と稱するもの即ち是なり。

學藝の發達 當時の文物中最も注目すべきを學藝の發

詩人

達とす即ち、エスキロス、ソフクレス、エウリピデスの三家は

悲劇の作者として佳曲多く、之に次で出でたるアリストフ、

史家

ネスは喜劇の詩宗として知らる史學には歴史の父と稱せ

らるヘロドートス、史眼炬の如きツキザデスあり又美術

の精華は萃めてアテネの、アクロポリスにありと云ふべく

建築

アクロポリス中バルセノン神殿は簡單嚴正なるドリア式

の建築にして其の神像は、フィアスの彫刻にかかれり凡そ

ギリシア建築の三式中ドリア式イオニア式は殆ど同時に

行はれ最後にコリント式行はるゝに至りぬ。

哲學家

殊に哲學は極盛の域に達しアテネにはプロタゴラス起り

て詭辨説を唱へたりしが、ソクラテス出づるに及び之に反

して徳即知の説を主張し遂に身を失ふを顧みず弟子プラ

トンは理想説を唱へてアカデミー學派を開きアリストテ

レスは更に其の門より出でて逍遙學派を創め理學各科の

父と稱せらる。

### 第九章 スバルタ及テーへの覇業

ペロポネソス戦争 曩にアテネのスバルタと休戦條約

を結ぶや兩國各その同盟の盟主となりて相侵さざるを約

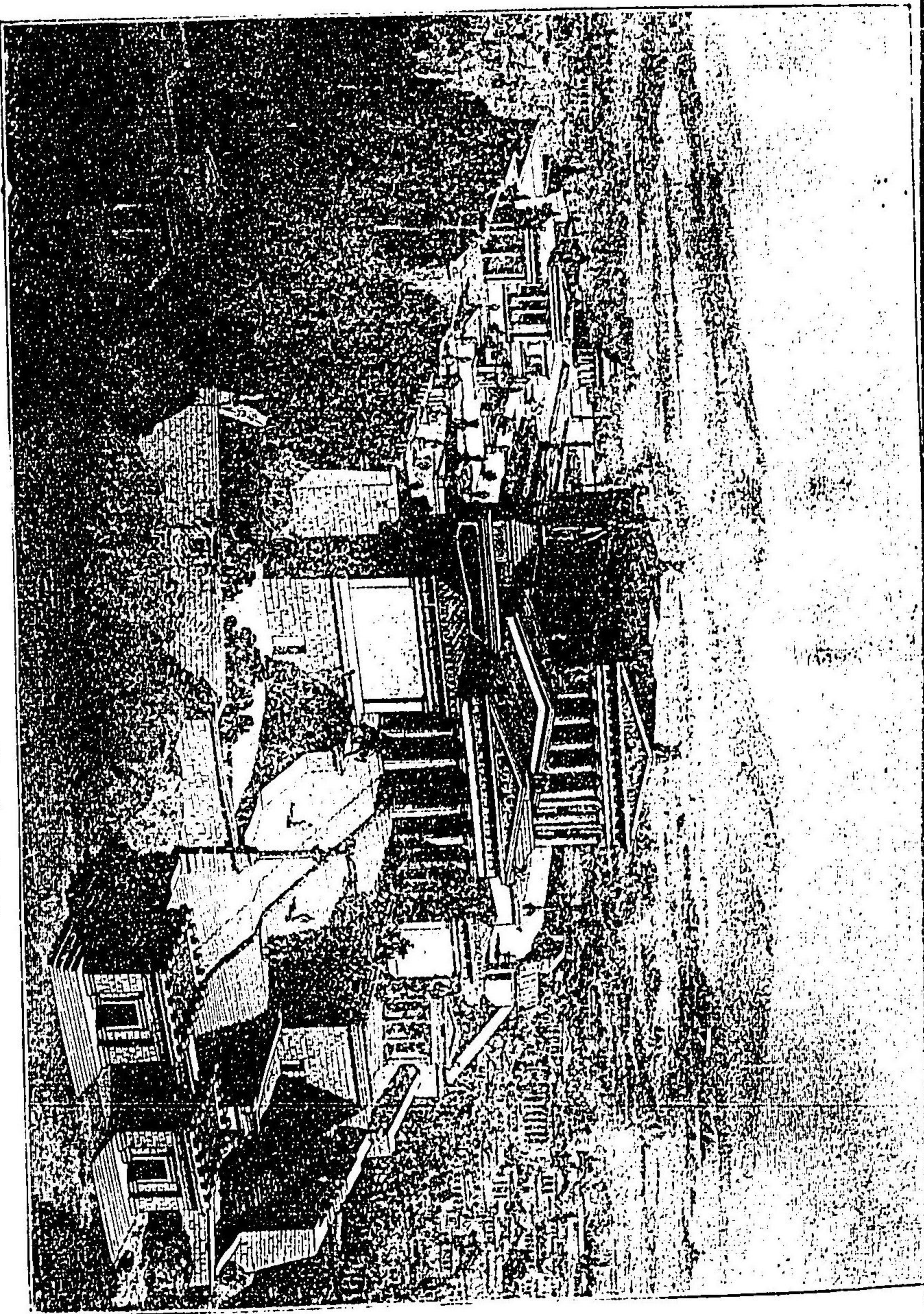
したりしがアテネの益隆盛に趣くを見ギリシア列國は此

を嫉み遂に同盟間に戦を惹起せり、時に紀元前四三一年

なり。

是に於てギリシア諸邦は或はアテネに黨し或はスパルタに與みし戦争前後二十七年に亘れり會アテネには疫病流行してペリクレス以下名士多く逝き統一の政令復行はれず紀元前四一五年アルキビアダスの策に従ひ故なくシナリアなるドリフ人の殖民市シラクサを伐ち却て大敗せしかばイオニア同盟諸國はアテネに叛して其の羈絆を脱せんとし、スパルタはペルシアの援を得て兵力益加はり紀元前四〇五年リサンドルを遣りてアテネの海軍を討滅せしめ翌年アテネを陥れ民主政治を廢し三十人の貴族をして政府を組織せしめたり之を三十僭主と云ふ然るに新政府スパルタの後援を恃みて暴政多かりしかば市民起ちて之

三十僭主



アテネの街景

を逐ひ民主政治を再興せしと雖も到底舊時の盛觀を復する能はざりき。

スパルタとペルシア　スパルタは戰勝の結果ギリシアの覇權を握り到る處貴族を助け民主政治の機滅を力めき、其の頃ヘルシアはアルタクセルクス二世の弟キロス王位を覬覦して叛旗を翻し事成らずして戰死したるも部下のギリシア傭兵は縱横にヘルシア内地を通過して歸國するを得たり是に於て、スパルタはヘルシア衰弱の實情を知り兵を遣りて小アジアに侵入せしめしかば、ヘルシアはまたアタネ、デーベ等久しくスパルタの專横を憎める諸市に説き相率ゐてスパルタを伐たしめ互に勝敗あり紀元前三八七年アンタルキダスの條約成りスパルタは小アジア

アンタルキダスの條約

に於けるギリシア諸市をヘルシアに與へ且つギリシア諸邦の自由自主を認許せり。

エバミノンダス

テーベの興廢 尋でスバルタは兵力を用ゐてテーベに貴族政治を樹立せしが、エバミノンダス、ペロピダスの徒相謀りて之を顛覆し民主政治を確立し、ポイオナアの諸市を連合してスバルタと戦ひ紀元前三七一年大にレウクトラに克ち以てギリシアの盟主權を收めたり。

エバミノンダスは勝に乗じてペロポネソスに入りスバルタの勢力を殺ぎたりしが經營未だ全からずしてマンチネアに戦死しテーベは俄然として衰運に向ひぬ。

### 第十章 マケドニアの興廢 アレクサンドルの業

デモステネスの遠慮

マケドニアの勃興 マケドニア人はギリシア人に近似せる民族なるに係らず久しく列國より蠻夷視せられしが、フィロポス王の代始めてギリシアの國事に關係しマケドニア沿岸の諸市を陥れ次でフキス人が列邦の紛議を惹起せるに乗じ、フキスを討じ功を以てデルファイの隣邦會議に加はるを得たりアテネの雄辯家デモステネス夙に其の心事を看破し同盟を組織して之に當るの策を説き辛ふじてアテネ及テーベを聯合するを得しと雖も機既に遅く紀元前三三八年聯合軍はケーロネアに大敗せり因てフィロポスはコリントに列國會議を開き、ヘルシア征討を議定せしが未だ發するに及ばずして部下の弑する所となれり時に紀元前三三六年なり。

アレクサンドルの遠征  
 フリボスの死するや、ギリシア列邦は皆背きてマケドニアの羈絆を脱せんとしたりしが太子アレクサンドル位を嗣ぎ忽ち之を威服してギリシアの元帥に推され紀元前三三四年兵三萬五千を率ゐ小アジアに入り向ふ所勝たざるはなく、グラニカス、イソス二大戦の後地中海の東岸を南下してエジプトに入りアレクサンドリア府を建てて地中海の制海權を固め再び鋒を轉じてペルシアの本國に向ひ、アルベラに於て大にダリオス三世の軍を破り次で、ダリオスを弑せるバクトリア太守を討滅し、是に於てペルシア全國は悉くアレクサンドルの有に歸し王は更に兵を進めてインドに入り、ボトロス王を破りて師を班し自ら本軍を率ゐて陸路を取り部將ネアル

ペルシアを  
 従へインド  
 に向ふ



總のスキーム

ユスをして海路ヘルシア灣に向はしめたり。

**東西文化の融合** アレクサンドルは征行中各所にアレクサンドリア府を建てて商業交通の便を開き將士に率先してヘルシアの衣服を著しヘルシアの公主と婚し力めて東西の文物人種を混一せんことを圖れり、然るに王は紀元前三二三年經營未だ成らずしてバビロンに病歿し宏大な版圖は諸將の相争ふ所となりて四分五裂し終にマケドニア、エジプト、ペリアの三大王國を生ぜり。

**三大王國** マケドニアは初め、カサンドルの手に歸して國威尙能くギリシア諸邦を駕御するに足りしが、アンタコノス朝に至り西隣の、エピロス王を得て國勢強大となりコリント灣の南北には、アカイア同盟及エトリア同



アレクサン  
ドリアの繁  
榮

盟起りて獨立を保てり。  
エジプトはプロトマイオスの領土にしてギリシアの文化に浴すること最も多く國都アレクサンドリアは東西貨物の集散點となりて繁榮を極めたるのみならずギリシアの學者多く此地に來りて學術の研鑽に従事せるが故にまた學問の淵藪となり、エウクリデスの幾何學プロトマイオスの地理學等を出し其の圖書館も亦頗る有名なりき。  
シリヤはセレウコス朝之を領し都をバビロンに定め其の版圖一に、西は地中海より東はインドに及び更に中インド、マガダ國に起れる旃陀羅笈多と兵を交へしが遂に和議を結び當時の國都アンナオキアは文華をアレクサンドリアと競へり然れども久しからずしてバルチア(安息)バクトリア

(天)の二國は北東にユダヤは南部に獨立を稱し版圖次第に收縮しぬ。

## 第二期　ローマ

### 第一章　地中海沿岸の諸國

カルタゴ　フェニキアの一殖民地なる、カルタゴは母國の衰頽せし後國運愈隆盛にして地中海の商權を握り其の沿岸及諸島嶼に幾多の殖民地を有し殊にシテリアに於ては島の西部を領して屢、東部のギリシア殖民地諸市と干戈を交へたり、已にしてギリシア人の勢力は痛く挫折せしと雖も新興のローマと容易に衝突するに至れり。

ローマ イタリア人はアリア派に屬して數多の類別ありしも就中ラチニ人はローマ史の本幹を成せる種族にして重に、ラチウムに住しウシブリア人サピニ人等は其の北東に住せり此他エトルリアには出處不明なるエトルスキ人あり上イタリアにはケルチ種あり又下イタリア及シチリアにはギリシヤ人居住せり。

ローマはラチニ人の一部落が、チベル河畔に一市を營みしに始まり次で同族の諸市及サピニ人の一市を聯合しローマの境域は七丘に跨るに至れり。

ローマ人は最初より征服者即ち貴族と被征服者即ち平民との二級に分れ一は政治の全權を握り一は久しく參政の權を缺けり、傳説に據ればローマは當初有力の部族より

二階級及政體

選出せる國王を戴き其の下に元老院及姓會あり貴族のみ之に列したりしが其の後新に隊會なるもの起り平民も亦之に加はるを得たり、然るに貴族等之を悦はず遂に國王を逐ひて共和政治を建て執政二人を置き其の任期を一年とせり。

この政變以後外患頻に起りしかば平民は相約して市外に退き獨立を宣言するに及び貴族一步を譲り護民官を置きて政府の非法を制止し民會を設けて隊會に相對するを得せしめ以て平民の怒を釋けり、已にして平民は更に一步を進め成文律を編して貴族の專横を防がんとし十名の委員を選びて十二銅表の法典を作りしが其の結果却て貴族の特權を確定するに止りしかば再び市外に走り遂に貴族

十二銅表

をして(一)民會の決議は隊會の決議と同等の効力を有すること(二)貴族平民間の結婚の適法なること(三)執政を廢して監察官を置き平民も亦之に任ずるを得ることを承認せしめたり。

然れども兩族の衝突尙止まず紀元前三七六年護民官リキニウス三大策を建て執政の職を復し其の一人は必ず平民たるべく平民の負債は既に支拂ひたる利子を元金より控除し殘額をば三年賦を以て償還せしめ又公田の借耕は一入五百シゲラを限り其の他は皆平民に分賦すべしとし激論十年の後可決せられたり翌年平民の一人選ばれて執政となり多年の軋轢は一旦茲に終局を告げぬ。

## 第二章 ローマのイタリア一統

隣族の征服 ケルト種に屬せるガリ人はもとガリアに住せしが北東なるケルトン人種に壓迫せらるゝに及び其の一部は北イタリアに徙り紀元前四世紀の初更に南下して、エトルリアを侵せり是に於てローマ人は從來近隣の諸部族就中エトルスキ人と戦へるに係らず兵を出して之を援け以て、ガリ人に當りしも戦利あらずローマは敵の焚掠する所となれり、因てローマは重幣を納れて僅に之を退くるを得しが久しからずして國勢を恢復し激戰數回遂に全くガリ人を中央イタリアより驅逐しぬ。サムニテ人は力能サムニテ戦争。ローマ人と同屬なるサムニテ人は力能

く、ローマに敵するに足り之と兵を交ふること五十年間三回に及び其の間ラナニ同盟を激してローマに背かしめ又ガリ人エトルスキ人と聯合して攻撃を行へり然れどもローマは苦戦數次にして遂に大に之に勝ち紀元前二八二年には殆ど全イタリアの主權を握るに至りぬ。

ギリシア殖民地の征定 當時ローマに従はざるは唯南方ギリシア殖民地あるのみ故にローマの之を征せんと欲して兵を出すや、タレントゥム市は援をエピロス王ピロスに求め王は直に大兵を率ゐて來援し戰象及フランクスを用ゐて連にローマ兵を破りき偶、シラクサの、ギリシア人が、カルタゴの攻撃に苦しみ難を告ぐるに會し、ピロスは鋒を轉じてシナリアに入り大にカルタゴ軍を破り再びイタリアに上

陸せしと雖も紀元前二七五年ベネベントに大敗して本國に歸れり是に於てかイタリアに於けるギリシア殖民地諸市はローマの版圖に没し、シナリアの大部はカルタゴに服し僅に島の南東部のシラクサ王の治下に獨立を有つあるのみ。

ローマのイタリア統御策 ローマはイタリアを統一

して其の人民をローマ人、ラナニ人、イタリア人の三級に分ち中央集權と地方自治とを混用せりローマ人はローマの國政に參與するを得る公民にして外交鑄幣等の大權を專有し、ラナニ人はラナニ諸市の公民にして容易にローマ人となり得べく、イタリア人は宣戰媾和に關し一に、ローマの指揮に従ふと雖も尙自治權を有せり。

第三章 ポエニ役

第一ポエニ戦争 此戦役はフェニキアの殖民市なるカルタゴと紀元前二六四年新興國なるローマと衝突せしに始まり前後三役其の間殆んど百年に亘りぬ。

當時カルタゴは海軍を以て一世に雄視し頗るローマを苦しめしがローマの刻苦して海軍を整備するに及び之に當る能はず遂にシナリアの領土を割讓して和を結びぬ是をローマ屬州の權輿と爲す次でローマはカルタゴの衰弱に乗じサルデニア、コルシカ兩島を略取し又北方のガリ人を討平して其の地に數多の殖民市を置き以てガリ人の再叛に備へたり。

ハンニバル

カンネーの戦

第二ポエニ戦争 其の頃カルタゴの將ハミルカルは兵を率ゐてイスパニアに入り其の地の銀鑛を利用して多數の傭兵を訓練し勢威日に強大に赴きしかばローマは大に之を忌み紀元前二一八年再び戦端を開けり因てハミルカルの子ハンニバルは直に大兵を率ゐてイスパニアを發し途をガリアに假りアルプ山脈の嶮を越え北イタリアに入り破竹の勢を以て南進し紀元前二一六年カンネーの戦に大にローマの軍を破りしかば、シラクサ、マケドニアの二王はカルタゴに通じてローマに宣戦しイタリア諸民族の風を望みて歸降するものも亦少からず然れどもローマ人は毫も屈する色なくマケドニア王援軍の路を絶ちシラクサを陥れイスパニアに於けるハンニバルの豫備軍を全滅し

ザマの戦

更に名將スキピオを派して直に敵の本國を衝かしめたり是に於てハンニバルは本國政府の召還に應じて倉皇歸國せしが紀元前二〇二年スキピオと、ザマに戦ひて大敗しカルタゴは悉く海外の領土を割き巨額の償金を出し又ローマの許可を得ずして猥りに兵を動かさざるべきを約し僅に和を結ぶを得たり。

#### 第四章　ローマの版圖

マケドニアとシリア　マケドニア王フィリポス五世は前に、ハンニバルと通じてローマを攻めしも遂に意の如くなる能はず尋てエジプト王の幼弱なるに乗じシリア王アンチオコス三世と約してエジプトを分領せんとせり是に

於てローマはエジプトの請を容れ兵をマケドニアに出し紀元前一九七年ギリシアの諸市と聯合して、フィロスを、キノスケファレに破りマケドニアをしてギリシア諸市の獨立を承認せしめたり時にアンチオコスは兵をギリシアに出してローマに敵せしが戦敗れてタウルス山脈以西の地を失ひき。

ローマの覇權　ローマ既に地中海濱に覇を稱すと雖もマケドニア及カルタゴは尙機に乗じてローマの羈絆を脱せんとせり因てローマは紀元前一九一年ナサルピナ・ガリ即ちアルプ山南のガリ人を平げたる後またマケドニアと開戦し全く之を滅して四州と爲し、ユが紀元前一四六年に至りマケドニアはギリシア諸州と共にローマの屬州とな



士 兵 の マ ー マ

榮ローマの繁

り是歳第三ポエニ戦争に於てカルタゴも亦滅び其の後小  
アジアのペルガモシ、アフリカ北岸のヌミデア、イスパニア  
の西部及トワンサルピナガリの南部相前後してローマの  
版圖に入りぬ。  
かくローマの諸外國を征服するや屬州の財貨は續々とし  
て流入し來り、ローマは繁榮比なく殊にギリシア征服はギ  
リシア文化の輸入となり従ひてラテン文學の發芽を促し  
ぬ、然れども奢侈柔弱の悪習はこれより起り徳義日に弛み  
昔時ローマ人が有したりし質素勇健の美風は漸く地を掃  
ふに至れり。

第五章 内亂時代

貧富の懸隔　ローマは諸國を服し文化進みしと雖も今は貴族と平民との差別全く消滅して更に一の閥族を生じ元老院の議席、政府の顯職皆其の占むる所となれり之に反して平民は人口の増殖と奴隸使役の風盛なるとにより漸く位置財産を失ひ貧富の懸隔甚しきに至りぬ然れどもローマ人は尙參政權を有したりしが、イタリア人及屬州の人民に至りては皆に參政權を有せざるのみならず、ローマ派遣の官吏の爲に痛く抑壓せられたり。

グラックス兄弟　是に於てナペリウス・グラックスの護民官となるや大に閥族の抑制を試み土地所有の制限を設け之に超ゆるものは皆收めて貧民に分配するの法律を制定し閥族の忌む所となりて非命の死を遂げたり、弟カイウス・グ



ラックス護民官となるに及び亡兄の遺志を継ぎ且つイタリ  
ア人にローマ市民権を與へんとせしが亦閩族の爲に襲は  
れて遂に自殺せり。

社會戰爭

グラックス兄弟の死後カイウス・マリウス民黨  
の首領となりヌミヂアの叛亂を平げ、シムブリー人及ネー  
トン人がガリアを侵せるを撃退し大に勢力を收めしが、ロ  
ーマの二大患は依然として舊態を改めず紀元前九〇年イ  
タリア人の大聯合を作りてローマ市民権を要求するに及  
びローマは己むを得ず市民権を賦與して概ね之を招降し  
たれどもサムニテ人及ルカニア人は敢て兵を棄てざりき  
是を社會戰爭となす此役マリウスの部將ルキウス・スルラ  
偉功を奏し兩將互に相忌むに至りしが偶ポントス征定の

マリウスと  
スルラとの  
確執

事起りてスルラの不在なるに乗じマリウスはサムニテ人  
と合しローマの虚を襲ひ自ら執政となれり、スルラ報を得  
て急に軍を班しマリウス黨を誅滅して終身の大元帥に任  
じ大に閩族の特權を確定せり。

東方諸國

黒海南東岸の、ポントスはミトラダテス六世  
に至り全く小アジアを併せ其の地のローマ人及イタリア  
人を虐殺し勢に乗じてギリシアに侵入せしがローマの元  
老院が、スルラに命じて東征に従はしむるに及び悉く其の  
侵地を返還して和を請へり然るにミトラダテスはスルラ  
の歿後再び叛旗を翻ししかばポンペイウス乃ち東征の主  
將となりてポントスに入り忽ち之を平定し更に進みて  
アルメニアを降しシリアを屬州と爲し又パレスチナを朝

ポンペイウ  
スの業

貢國と爲せり是に於てか、ローマの國威はエウフラト河に及び一大強國バルナアと境を接するに至りぬ。

第二、三頭政治

當時ローマにはキケロ、クラッス、カト

ポンペイウス

ケイザルとクラッス

ユリウス・ケイザル等の大政治家並び起り各其の黨與を率ゐて相争ひしがポンペイウスはカトの指導せる元老院と合はず、ケイザル及クラッスと結び紀元前六〇年第一、三頭政治を作り元老院を抑へて政權を左右せり。

次でクラッスはローマの東境を擴張せんと欲し、バルナアを伐ちしも却て敵の術中に陥りて敗死しければアルメニアはバルナアに歸降しパレスチナは獨立し東方に於ける

ケイザルの業

ローマの勢威頓に地に墜ちぬ、之に反してケイザルのガリア征伐は前後八年に亘り悉く土民を服し更にブリタニア

に上陸して其の一部を略し又ライン河を横ざりて、ゲルマニアに入れり。

此間ポンペイウス獨り、ローマに止まりて主權を握りしがケイザルの威名日に盛なるを嫉み元老院と結びて之を招

ポンペイウス殺さる

還したり、是に於てケイザル奮然決するところあり紀元前四九年兵を率ゐローマに入りポンペイウスのギリシアに逃れたるを追ひ大に之をフルサルに破り尾撃してエジプトに到りぬ然るにポンペイウスは已に土人の爲に殺されたりしかばケイザル厚く之を葬りエジプトの公主クレオパトラを助けて女王の位に即け、ポントスの反を定め又

アフリカ、イスパニアに於ける敵の餘黨を平げてローマに凱旋せり。

ケイザルの功績

ケイザルは今や大元帥となり又大總督の稱號を得て文武の大權を總攬し治績甚だ多かりき、ローマの市民權を推してガリ人に及しエジプトの曆法を採りて所謂ユリウス曆を頒布し、兵制財制を革め刑法を改良しまた文學技藝を獎勵せる等是なり、然れどもケイザルの榮達を嫉むものと元老院の多數とはローマ根本の政治組織なる共和制の前途を憂ひ紀元前四四年カシウス、ブルッス等相謀りてケイザルを議事堂に刺殺しぬ。

アントニウス  
オクタウィ  
アヌス

第二三頭政治 ケイザルの死後部將アントニウス、快辯を振ひて人心を激昂せしめしかば、カレウス、ブルッス等ギリシアに逃走せり、アントニウス乃ちケイザルの姪にして且つ其の養子なるオクタウィアヌス及レピッスと結びて第

クレオパト

二、三頭政治を作り大に反對黨の人士を殺戮し紀元前四二年カシウス等をスリッピに破りて之を殺しぬ。次でアントニウス、オクタウィアヌスの兩人はレピッスの權を收め天下を兩分し、前者は東部を領してアレクサンドリアに居り、後者は西部を領してローマに居れり、然るにアントニウスはバルチアを親征して利あらず且つエジプト女王クレオパトヲと婚し之にローマの領土を與へしかばオクタウィアヌスは之を名として問罪の師を興しぬ紀元前三年兩軍ギリシアの西岸なるアクチウムに戦ひアントニウス、クレオパトラ大敗して自殺しエジプトはローマの屬州となれり。

## 第六章 帝政の初期

帝政の初期 オクタウィアヌス既に天下を平げ皇帝の實を有せしかど過去の歴史に鑑みて共和政治の外形を保維し元老院民會等を改革しアウグスツスの尊號を受けて、アウグスツス・ケイザルと稱せり是より以後をローマ帝國といふ。

アウグスツスの治世 當時ローマの版圖は頗る廣大にして北はライン河ドナウ河より南はサハラの大沙漠に至り西は大西洋より東はエウフラト河に及び二十七の屬州はアウグスツスと元老院とにて之を分轄せり、ローマは即ち此首府にして東西文化の中心を占め繁榮前古比なし即ち建

版圖及文化



アウグスツス

築にはフーラム、元老院、競馬場、劇場、水道等の壯麗なるものありて人目を眩し文學にはウエルギリウス、ホラチウス、オウ、ヂウス、リウ、ウス等の大家起りて所謂アウグスツス時代の文學を興せり。

ユリウス家諸帝 アウグスツスの歿後或は養子となり或は女統をひける、ユリウス家の四帝相次ぎて位に上り皆多少の悪名を残したりしが最後の皇帝ネロ最も甚しかりき其の間ローマは、ドナウ河畔を定め略ブリタニアを服し又アルメニアを従へしが、ゲルマニア征伐は遂に好果を収めずして止めたり。

帝國の最大版圖 爾後ローマは皇帝の廢立相次ぎしが、ウエスパンシアヌスの立つに及び帝權漸く固く始めて位を

二人の英主

其の二子に傳ふるを得たり、紀元九六年より一八〇年に至るまでは所謂良帝時代にして英明の五帝相接ぎて出で就中トラヤヌス帝の時にはダキア、アルメニア、メソポタミア、アシリアの諸國皆ローマの屬州となり帝國の版圖は最大の膨脹をなし又マルクス・ウレリウス帝の時には法學、哲學、文學、史學等大に發達し其の影響永く後世に及べり後漢に通ぜし大秦國王安敦は此帝なりと云ふ。

**兵士の驕傲** 二世紀の終よりローマの勢漸く萎縮せり初めアウグスツスはローマ府並にイタリアに近衛兵を置き諸屬州に鎮臺兵を置きしが、アウレリウスの歿するに及び兵士驕恣にして隨意に皇帝を廢立せり、殊にカラカラ帝が全帝國の自由人民にローマ市民權を與へしより各地

の鎮兵皆其の主將を擁立して皇帝となし甚しきは同時に數帝ありて各一方に雄視するありき。

**二大外敵** 是時に當りローマは新に二勁敵の勃興に逢

へり、ヘルシア人及ノートン人は是なり、二二六年ササン朝の祖アルタフシルなる者バルチアを滅してヘルシア王國を建て頻に境土を西方に擴めしを以てローマの諸帝は屢之と戦ひ、ウレリアヌス帝の如きは敗れて敵の捕ふる所となり又ノートン人中最も強盛なるはゴート人とフランク人とにして共に北方より來りてローマの領土を侵し、アウレリアヌス帝は止むなくダキアをゴート人に讓與せり。

**帝國の新區劃** ローマ内外の形勢此の如くなりしかば二八四年デオクレチアヌス帝の位に即くや之が救濟の策

を講じ、全國を四分し、二人のパウロと二人のペテロとを置き、分領せしめ、已れは東部を直轄せり、然れども此制永續せず、ガオクレンヤヌスの讓位後、内亂忽ち起りき。

### 第七章 キリスト教の蔓延

イエス・キリスト 基督教の開祖をイエス・キリストと云ふ紀元前四年ユダヤのベツレヘムに生れ、ユダヤに據りて新に一宗教を創め、自ら舊教の豫言に應ぜる救世主なりと稱し、一視同仁の義を説きて萬民の救済を計れり、然るに時人キリストを目して世を蠱惑する者とし、捕へて之を十字架上に磔殺せしかば、弟子等乃ち遺命を奉じて四方に布教せり、之を使徒と云ふ、就中パウロは博學多識にして能く學

### 聖書

者間の難詰に答へたり、舊約全書に對する新約全書はキリスト及使徒等の言行教義を集めたるものにして、以上兩書を合して聖書とは云ふなり。

キリスト教の迫害 ローマの諸帝はキリスト教を以て治安に妨害ありと信じ、屢迫害を加へたり、蓋しローマは多神教國にして、殊に帝政の確立以後は皇帝崇拜を以て國是と爲せしかば、勢ひ之に反せる一神教を容るること能はずればなり、然れども教徒等は一難を経る毎に信仰の念愈厚く、改宗者は愈増加し、志士も亦道德の腐敗を歎じて寧ろ之を歓迎するに至れり。  
コンスタンチヌス 三二三年コンスタンチヌス大帝の全國を一統するや、自らキリスト教に入りて之を國教とし

キリスト教の流行

三二五年宗教會議を小アジアの、ニケーアに開き又國都をビザンチオンに遷し之をコンスタンチンブルと稱しぬ、其の後ジュリアノ帝に至り力を極めてキリスト教を撲滅せんとしたりしが其の功なく四世紀の終には天下到る所また公然多神教を奉ずる者を見ざるに至れり。

第二編 中古史

第一期 種族の遷徙よりベルダン條約

まで (紀元三七五年―八四三年)

第一章 種族の遷徙

チートン人 チートン人は紀元前一世紀の頃中部ヨーロッパに勃興せる一大民族にして、もと萬有を信じ、牧畜、漁獵を業とし且つ極めて戦闘を好みたりしが、ローマ人と交渉を生ずるに及び漸く其の文化を收用し不羈獨立の精神と義侠、廉潔の思想とにより一種獨特の文明を開き遂に能く西洋史上に一新時期を畫するに至れり。  
此人種中最も有名なるは、ゴート、ワンダル、フランク、ブルグ



ント、ランゴバルト、サクス、スカンデナヴィア等にして就中ゴ  
ートとワンダル人とは西ローマ帝國の滅亡に大關係を有  
せり。

ゴート人の侵入　ゴート人は東西兩部に分れ東ゴート  
は黒海の北岸に居り、西ゴートはドナウ河の北岸に居りし  
が四世紀の下半蒙古種の一派なるフン人裏海の北に起り、  
先づ東ゴートを服し轉じて西ゴートに迫りしかば西ゴ  
ートは三七六年ローマ帝ワレンヌに請ひて難をドナウ河の  
南岸に避けたり。

西ゴート王國　然るに西ゴートはローマ人の虐遇を憤  
り兵を擧げて、コンスタンチヌブルに向ひワレンヌの軍を  
アドリアノブルに破りぬ已にして、テオドシウス一世帝位

ローマの二  
分

に即き西ゴートの叛亂を鎮定し又キリスト教を獎勵して  
信仰箇條を一にせしが三九五年帝歿し其の二子遺命によ  
りて帝國を分領しローマ全く東西に分裂するに及び西ゴ  
ートは其の主アラリクを奉じて再びイタリアに入りロー  
マを陥れ又南部イタリアを蹂躪せり。

其の頃西帝國の諸要地に駐屯せる軍隊は多くイタリア防  
禦の爲に召還せられしを以てワンダルは、ガリアを横ぎり  
てイスパニアに侵入せり是に於て西ゴートは西帝國の爲  
に之を討じ遂にガリアの南部とイスパニアの大半とを併  
せ四一四年西ゴート王國を建設し又ワンダル王ゲンセリッ  
クは部衆を率ゐてアフリカに入り、カルタゴの遺地に據り  
ワンダル王國を興しぬ。

ワンダル王  
國興る

シロン  
の戦

フン人の盛衰 フン人はボルガ、ドナウ兩河間の地を占領し其の王アキラは東帝國を侵して賠償年金を徴し更にガリアに侵入せり西帝國は西ゴート、フランク人等と連合し四五一年大に之をシロン附近に破りしが此戰たる實に東西兩人種が歐洲に於ける權勢を決せるものにして彼のマラトンの戰に比すべきなり。

ローマの分  
裂

翌年アキラ途を轉じてイタリヤに入り將にローマを陥れんとせしが和を許して軍を班しぬ、次でアキラ死し其の廣大なる版圖は忽ち四分五裂せり。

西ローマの滅亡 かくローマは一旦禍難を免れしと雖も四五五年にはワンドアル王ゲンセリク、グの海を渡りて、ローマに入り殺戮掠奪を恣にせるより國勢萎靡して再振の望

西ローマ帝  
國亡ぶ

なく實權は舉げて其の傭兵なる蠻人の手に在りしが其の將オドロケル皇帝を廢し自立してイタリヤ王となり西ローマ帝國遂に滅びぬ時に紀元四七六年なり。

ゲルマニア諸王國 東ゴート王、テオドリッは四九三年東ローマ帝の命を受けてオドロケルを討滅し功に依りてイタリヤを治むること三十餘年に亘り勢威、半島以外に及びぬ。

フランク漸  
く盛なり

是より先きライン河の中流及下流附近に住せし、フランク人はメロウ、ンガ家の祖フロドウ、ヒ王の代、國勢大に張り北ガリアを併せ南東ガリアに據れるブルグンドを服し又西ゴートを拂ひて境をカロヌヌ河の南に擴め首府をパリに定め、王自らキリスト教を奉じぬ。

ブリタニアの住民をブリトン人と云ふケルケ種一派に  
屬し嘗てローマ人の征服する所となりしが五世紀の半に、  
ヨーロッパ西北海岸なるアンゲル、サクス等は海を渡りて此  
土に來りブリトン人を征して此地を占領せり。

第二章 東ローマ ペルシア サラケン

東ローマ帝國 西ローマ滅ぶに及びコンスタンチノ  
ブルに於けるローマ皇帝は名實相叶はず勢威頓に地に落ち  
公用には必ずラテン語を用ゐしと雖も普通一般に行はれ  
しはギリシア語にしてコンスタンチノブルはギリシア文  
學の淵藪となりき。  
ユスチニアヌス 六世紀の上半ユスチニアヌス帝出で

ネストリウ  
ス教

名将ベリサリウスをして、ペルシアを抑へ、ワンダール王國を  
討滅し又イタリヤを復せしめ更に別將を遣りてイスパニ  
アの南東部を略取せしめたり、帝の世ネストリウス派と稱  
するキリスト教の一派を逐ひしが其の派東進して遂に唐  
の貞觀中を以て支那に入り景教と稱せり、この帝の時ペル  
シアの僧にして、支那より歸れる者養蠶術を傳へ以て今日  
南歐に於ける養蠶の濫觴を爲せりと云ふ、殊にこの帝の時  
編纂せるローマ法典は後世英國を除き歐洲諸國法典の基  
礎となれるものなり。

ペルシアとの交渉 西方に於て種族遷徙の大擾亂を  
極めし時に方り東方のペルシアも亦エフタル(嚙嚙)の侵寇  
に苦しみき然れども、ベリサリウスの來侵するに及びペル

シアは宿怨を棄て、エフタルと和し、ローマ軍と戦ひて互に勝敗あり、明主ホスロー一世に至り、ユスタシアヌス帝の成功を忌み、東ゴート人の請を容れ、アンチナキヤを陥れしが、五六三年和成り、是より専らエフタルを圖りぬ、當時匈奴の支族なるトルコ(突厥)は東アルタイ山脈より西カスピ海に至るの大版圖を有し、ペルシアと結びてエフタルを夾撃し、遂に之を滅したりしが、後幾もなくして、東ローマと結び却てペルシアを侵し、己にしてペルシアはホスロー二世位に即き、東ローマの内亂に乗じて侵略せしも、撃ち破られて和を結びぬ、而して此間イスパニアの南東部は復西ゴート人の恢復する所となり、ペルシア、ローマ共に戦に疲れたり。

ムハメッド　サラケン人即ちアラビヤ人は重に偶像教を奉じたりしが、ムハメッドの出づるに及び所謂ムハメッド教(回教)を唱へ散布せる諸部落を合して一國民となし、ムハメッドは五七一年メッカに生れ、年四十にして深山に隠れ、黙想すること數年、乃ち出て法を説きて曰く、眞神は唯一あるのみ、余は其の豫言者なりと、然るにメッカ市民の攻撃甚しく、六二二年メヂナに奔りしが、其の後、メッカを陥れ、遂に全國民をして自己の主權と教義とを承認せしめたり、回教徒は教祖出奔の年を紀元元年となす。

サラケン人の外征　六三二年ムハメッドのメヂナに歿してより、其の繼承者は皆、ハリファと稱し、能く教祖の遺志を紹ぎ、ヨーロッパ貢賦、劍戟の三者を以て外邦に臨み、先づシリ

ヘルシア滅ぶ

ア、エジプトを席卷し六四二年大にヘルシア軍を破りき時にヘルシア王は援を唐の太宗に求めしも之を得ずササン朝遂に滅亡の悲運に陥りぬ。

初めハリフは代々、メヂナに住せしが、ムアウヤのオンマヤ朝を創むるに至り居をダマスクに徙せり爾來サラケン人は連年兵を用ゐる東は中央亞細亞を征定してインドに入り西は直に、コンスタンチノブルに迫り、北アフリカを定め、ジブラルタルを渡りて西ゴート王國を滅し更に進んでガリアに入らんとせり然れどもコンスタンチノブル二回の攻圍は共に志を得る能はず又ガリアに於ては七三二年フランク王國の宮宰カロロマルテルの爲に大に、ツールに撃破せられたり。

サラケンの膨脹

サラケンの文化

回回教國の分裂　イスパニアより、インドに及べるサラケン人の大版圖は永く繼續するを得ず、ハリフ繼承の事に關し國內大に亂れたり七五〇年アブル・アッバス、オシマヤ朝を倒してアッバス朝を建て都をバグダードに徙すや、オシマヤ家の一族アブデル・ラーマン、イスパニアに奔り自立してハリフと稱しコルドバに都し回回教國東西に分裂せり。

かくて東西のハリフは盛に文學技藝を獎勵せしかば文學科學等皆長足の進歩を爲せり、加之羅針盤によりて遠洋を往來し陸には隊商を組みて各地に通商すること行はれしかばバグダードは東西の文化及商業の中心となりぬ。

第三章 東ヨーロッパと西ヨーロッパ

カロロ大帝の業

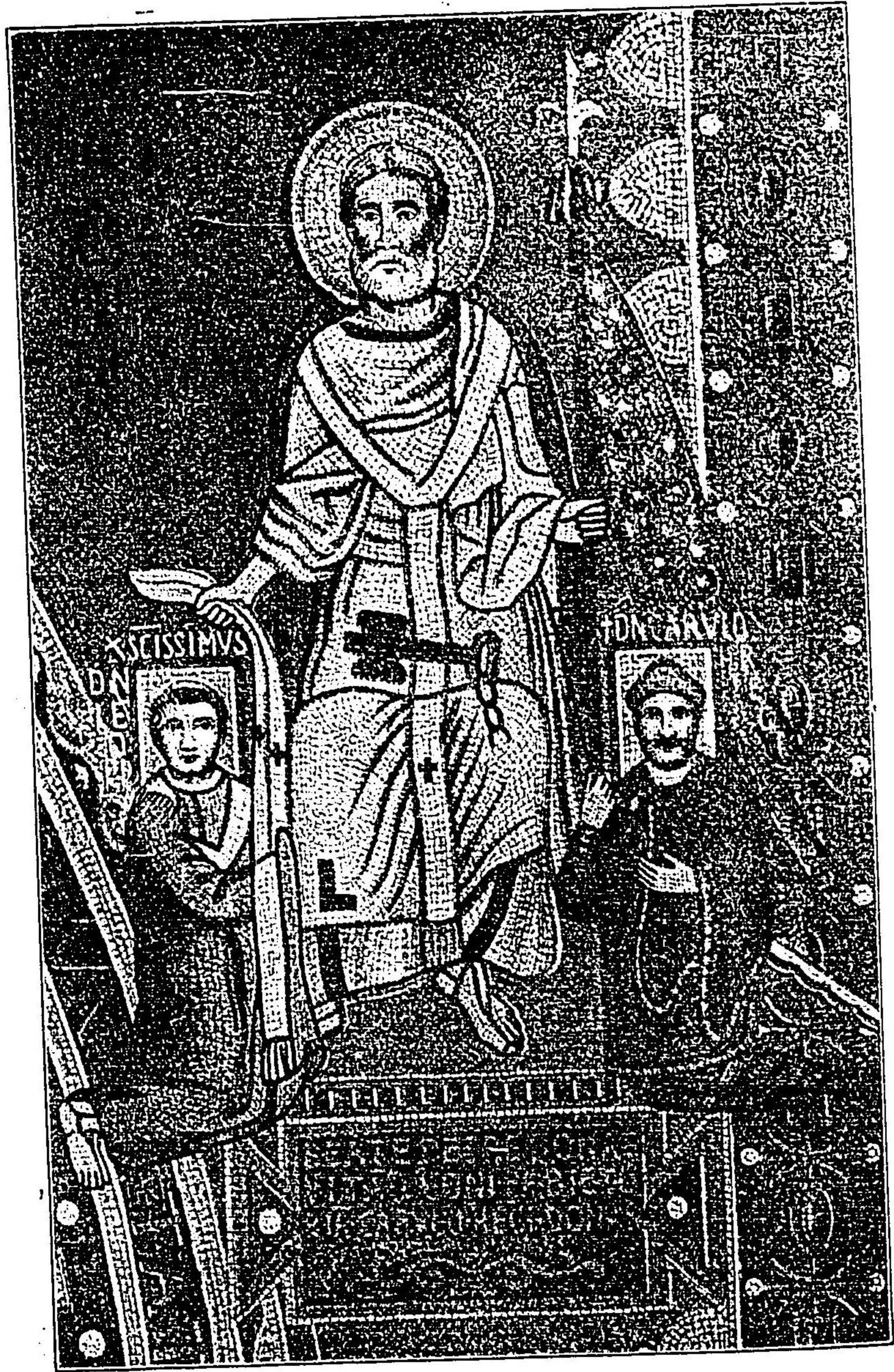
ローマ法王 キリスト教會の組織は當初頗る平等主義を採りしが漸次ローマ帝國の組織に倣ひ、僧侶の階級、權限を生じ、牧師は僧正に、僧正は大僧正に從屬せり然るに、ローマの大僧正は府の元來政治上の中心たりしと、ユスチニアヌス帝のイタリア一統後知事を此地に置かざりしとにより威權他に擢で遂に法王の號を獨占するに至れり。

畫像破壞時代 東ローマは八世紀の初め、レオ三世帝位に即きサラケン人を擊退し諸制度を改革し大に帝國の面目を一新せしと雖もキリスト教の改革を企つるに及び頗

る西方に於ける權威を失墜せり、抑もキリスト教は一神教にして偶像の禮拜を許さざりしに純潔の風は年と共に去り各地の教會概ね畫像禮拜の擧ありしかば、レオは七二六年斷然之を禁止せり之を畫像破壞時代と云ふ然るに、ローマ法王は啻に敕令を奉せざるのみならず畫像破壞者を以て外道なりと宣告し東帝の羈絆を脱して、フランク王に頼れり是に於て東西二教會は全く分離し東はギリシア正教派と稱し西はローマ正教派と稱せしが畫像禮拜の弊は久しからずしてまた東帝國にも行はれぬ。

フランク王國 フランク王國は、メロウ、ンガ家の末路諸王、徒に虚器を擁するのみにして實權は宮宰カロリ、ンガ家に移りカロロ、マルテルの子ピピンに至り遂に推されてフ

ピピン王



世三オレ王法

帝大ロロカ

ラシク國王となれり時にランゴバルド人はラヴェンナ及附  
 近の皇帝領を奪ひ進みでローマに迫りしかば、ビビンは法  
 王の請を容れランゴバルド人を撃退し悉く其の侵地を復  
 して法王に贈りぬ之を法王領の基礎とす。  
 カロロ大帝 ビビン歿して子カロロ繼ぐに及び四方を  
 裁定してローマ帝國を再興するの志あり北は、サクズを平  
 げ南はランゴバルド王國を滅して自ら其の國王と稱し南  
 西はイスパニアの回回教徒よりエプロ河以北の地を奪ひ  
 又東は、プロトル人を逐ひてドナウ河中流以西の地を收め  
 たり、時に東ローマにては女帝イレナ政を執りしかば法王  
 レオ三世は之を名として西ローマ帝選立の議を定め八〇  
 〇年カロロをローマに迎へて親しく皇帝の金冠を加へた

カロー大帝  
の功績

り。  
大帝銳意治を圖り都を、フーヘンに奠め領内を數多の縣に分ち縣毎に伯を置き又邊陲の縣にはマクル伯、帝室領地にはフルツ伯を置きて之を治めしめ毎年一回、五月會を開き知事僧侶等を會して立法の助言を求めき、其の他農工を保護し學術を獎勵し寺院を建て學校を興す等其の治績舉げて數ふべからざるなり。

二帝國と一ハリフア國　ローマ帝國は、今や全く兩分し

東帝國はアドリア海以東の領土の外にシナリヤ及南部イタリアを有し其の住民は、公私を問はずギリシア語を用ゐギリシア正教派を信じ、西帝國は北部イタリア、ゲルマニア、ガリア及イスパニアの一部を含み其の住民は概ねキリスト



ン語を談じラテン語を書し、ローマ正教派を信ぜり而してかくキリスト教國の兩分せるは回回教國の兩分せるに應じ四國各同宗教のものを棄てて却て異宗教の離隔せるものと親しめり。

帝國四分す

ベルダン條約 八一四年大帝歿して子、ルイス嗣ぎしが已にしてルイスの領土を四子に分たんとするや兄弟相争ひて息まず八四三年ベルダンの條約を結び長子、ロタールはイタリア及中央フランクを得て帝號を稱し、第三子、ルイスは東部フランクを第四子、カロロは西部フランクを得たり以後紛擾相踵ぎ一旦合併せしも亦分裂してフランクは東西に分れ今日のドイツ及フランスの基をなせるものにして二者各、其の特色を維持して進歩發達し言語風俗も

亦全く異なるに至れり。

### 第二期 ベルダン條約より大空位時代

まで (紀元八四三年—一二五六年)

### 第一章 ノルマンの横行

ノルマン ノルマンはスカンデナヴィア半島に住し常に輕艇を以て沿海各地に侵寇せりイギリスに於ては、北海の海岸に於てはノルマン、東ヨーロッパに於ては、ルスと呼ばれ、スラフ人と共に今日のロシアの基をなせり。デーン人とイギリス、イギリスは九世紀の上半、エグベルト王出でて七王國を一統したる後頻にデーン人の侵寇を被り王孫アルフレド大王の賢明勇武なるも尙全く之

を撃攘する能はず大王の歿後、デン人復叛し其の主カヌ  
 ート一〇一七年を以て英國王位に上りイギリス、デンマル  
 ク、ノルウェー及スウェーデンの一部を領し一時勢盛なりしが、  
 カヌートの歿後アルフレドの後裔エドワード王位を復す  
 るを得たり。  
 ノルマンディーノルマンは九世紀の後半より屢フラン  
 クの地を侵略し或は、パリ伯オドに破られ或は東フランク  
 王アルヌルフに撃退せられしと雖も南侵の力は毫も挫折  
 する所なく九一一年ノルマンの將ロロは西フランク王カ  
 ロロよりセイヌ河口の地を得てノルマンディー侯國を建て  
 王の女と婚しキリスト教を奉じぬ。  
 已にして英王エドワード歿するやノルマンディー侯ウィル

ノルマンの  
版圖

ムは王と血縁なるを名とし兵を率ゐてイギリスに入り一  
 ○六六六位に即きてウィルヘルム一世と稱しフランス語及ノ  
 ルマンの習慣をイギリスに移殖しき。  
 ロシア ノルマンはまた東方に於てロシアの基を開き  
 ぬ即ち八六二年ルスの一酋長ルーリクは、スラブ族の内訌  
 に乗じノブゴロドに據り同時に他の一群はキエフに據り  
 しが、ルーリクの嗣イゴルに至り、キエフを併せ益、スラブ族  
 を征し更に進みて東帝國を侵し有利なる通商條約を結び  
 き。  
 其の他、ノルマンは西はイスラント及グリーンランドに移  
 住し北アメリカに達し又南は大西洋より地中海に入りサ  
 ラケン人よりナポリ及シチリアを略取せり。

第二章 神聖ローマ帝國、法王の權威  
大憲章

西フランク王國 西フランクはカロロ大帝の歿後諸王徒に虚位を擁するに過ぎざりしが九世紀の下半パリ伯オドの選ばれて王位に即きしよりオドの子孫とカロリンガ家とよりして國王を出すこと百年に亘りき九八七年カロリンガ家絶えオドの後裔フーゴ・カペト位に上りパリに都してフランス王國を確立せり。  
ブルゴニーとイタリア ブルゴニー王國はロムヌ、ソトヌ兩河とアルプ山間とに起り其後數境域の伸縮あり又ロタールの子孫はイタリアを領して帝號を稱せしが

八八七年以來國威頗る衰へ外は連にサラケン人の侵寇を被り又東帝領なる南部イタリアの膨脹するあり而してイタリアは九六二年以來ブルゴニーは二〇三二年以來ドイツと同一王を戴くこととなりぬ。  
東フランク王國 東フランクに於てはカロリンガ家依然として政權を有し、アルヌルフ王はオド王をして臣屬の禮を取らしめ又ローマに赴きて帝冠を得しが、其の子ルイスに至り血統絶え諸侯伯相會し、フランコニア侯ユンラデを立てたり爾來ドイツは選舉を以て國王を定むることとなり王歿してサクソニア侯ヘンリー一世立ち内は諸侯の專横を抑へ外はドイツ人を破りスラブ種に屬するウインド、ポーランド、ボヘミア人を防ぎ又マジール即ちハンガリア人

を討ち大に國威を振起せり。  
 オトー大帝 子オトー一世亦英邁にして諸侯の反亂臺鎮定し東はマシール人を逐ひて永く其の患を絶ち南はイタリアに入りて、ベレンガル王を服し九六二年法王シヤン十二世より帝冠を加へられ號して神聖ローマ皇帝エンペラと云へり、以降ドイツに王たる者は必ずやミラノに於てイタリア王冠を受けローマに於て帝冠を受くるを例としぬ。  
 フランコニア家 オトー大帝帝位を踐みしより六十餘年にしてサクソニア家絶え、フランコニア家のコンラデ二世之に代り、ブルゴニーを併せぬ子ヘンリ三世はドイツ、イタリアに於ける帝權を恢復し驕暴なる法王を廢し數々ドイツの僧正を立てて法王と爲しき。

哀を法皇に乞ふ

グレゴリオ七世 初めカロロ大帝は帝權の法王權の上にあるを確定せしと雖も大帝の歿後法王は漸く政治上の勢力を占めたり一〇七三年グレゴリオ七世の法王となるや法王を各國君主の上に置きて感化教導の任に當らしめんと欲し先づローマ本山の大改革を行ひ僧侶の妻帯、僧官の賣買、及俗界の君主の僧官を任命するを嚴禁し苟も之に背く者あらば破門すべしと宣言せり破門とはキリスト教徒の籍より除かるるを云ふ。  
 ヘンリ四世 時にドイツはヘンリ三世の子ヘンリ四世位に在り此令を蔑視し、グレゴリオを廢せんとして却て破門せられ國內の諸侯も亦多く法王に黨せしかば己むを得ず單身カノサに赴き哀を法王に乞ひ僅に赦さるるを得た



く跪に前の人夫伯クルマのサノカ世四リンへ

二黨派

フレデリキ  
ハルパロツ

り已にして、ドイツ人民大に勤王の心を起し、ヘンリは兵を率ゐて、（中略）に薄リ、グレンエリホを廢し、新法王を擁立して、其の手より帝冠を受けたり。（中略）スタウフエン家 其の後皇帝と法王との争益甚しく、一三八年スタウフエン家の祖コンラデ三世の位に即くや之を援助するギベリン黨と之に反對するゲルフ黨とを生じ、ゲルフ黨は常に法王の助を借りしを以て遂に法王黨と同意義となりぬ、次帝フレデリキ一世はハルパロツと呼ばれ、義勇寛洪中世武士の龜鑑たり、ゲルフ黨の首領サクソニア侯ヘンリと戦ひ之を英國に逐ひ、又連年法王及イタリア諸市と干戈を交へしが遂に志を得る能はず、二傳してフレデリキ二世に至り外は法王及イタリア諸市と争ひ内は諸侯

の歡心を得んが爲に新に特權を授與し帝威萎縮して紛擾相次ぎ一二五六年より一二七三年に至るまで全く皇帝を缺シイ、イン、クレ、シムげり之を大空位時代と云ふ、

### 第三章 十字軍と東方諸國

**東方諸國** 畫像破壊時代以後、東帝國の盛衰は一ならず九世紀には、シナリア、クレテ二島をサラケン人の爲に奪はれしが此の紀の終より十一世紀の初に亘り國威大に振ひイタリアに於ける領土を擴めクレテを復し殊にアジアに於ては數、サラケン人を破り、エウフラト河以西の地を略取せり。

東ハリファ國はアル・マムンの後内訌頻に起り小邦群起して

また統一すべからず十一世紀の初めセルシウクと稱するトルコ人ペルシアの北部に起り西アジア一面を蠶食し都をイスバハーンに奠めてバグダードのハリフをして僅に其の教權を維持せしめしが同世紀の終に至り幾多のサルタン國に分裂しき。

十字軍の發端

初めサラケン人のイェルサレムを有せし

頃は、キリストの聖墓を巡拜する者の爲に利を獲ること多かりしを以て敢て之を虐遇せざりしがトルコ人の同地を占領するに及び痛く、キリスト教徒を疾視し虐待に及る所なかりき佛國の僧ペテロ親しく慘狀を目撃し熱心聖地恢復の舉を唱導しギリシア皇帝も亦トルコ人の猖獗に苦しみ遙に書を寄せて援を法王ウルバノ二世に請へり、一〇

導  
ペテロの唱

九五年法王乃ちクレルモンに會議を開き異教徒に對して神聖戰爭を開くべきに決しぬ之を十字軍と稱す。

第一十字軍

翌年第一十字軍は佛國の一貴族ゴドフレ

ゴドフレド

ドを盟主とし小アジアに入り所在のトルコ人を攘斥し一

〇九九年遂にイェルサレムを占領しき是に於てゴドフレドは衆に推されて聖地守護者となり後王號を稱しぬ。

第二及第三十字軍

イェルサレム王國はまたトルコの攻

撃に苦み一一四七年第二十字軍を起し、ドイツ王コンラド三世はフランス王ルイス七世と共に親しく難に赴きしが功なくして還れり。

已にしてエジプトのサルタン、サラヂンなる者チグリス河以西のトルコ領を併吞し一一八七年イェルサレム王國を亡

リチャード  
一世  
フリップ  
ボ  
二  
世  
レ  
デ  
リ  
キ  
ー

せしかばイギリス王リチャード一世、フランス王フィリップ二世、及ドイツ帝フレデリキ一世は各、大兵を率ゐて遠征の途に上れり然るに皇帝は小アジアに溺死し、リチャードはフリップと隙を生じ第三十字軍も亦遂に功を收むること能はざりき。

第四十字軍

第四十字軍はフランス、イタリア、ドイツ諸侯の出征せるものなりしが軍士聖地に赴かずコンスタンチノブルの内亂に干渉し一二〇四年國都を陥れてラテン帝國を建立せり、蓋しギリシア正教派に屬するものをギリシア人と云ふに對しローマ正教派に屬するものをラテン人とは云ふなり。

十字軍の終局

第五十字軍に際しドイツ帝フレデリキ

十字軍の結  
果

二世はエジプトのサルタンと約してイェルサレムを得たれども幾もなくして回教を信ずる、ホラズム人の爲に亡され爾後二回の十字軍ありしも皆効なくして歸り一二九一年キリスト教は全くアジアの根據を失ひて局を結べり。十字軍は法王及ローマ教會の勢力を増進せしめ封建制度の衰微を來し義俠廉耻の氣風を激勵し東洋の學術工藝を傳へ又西歐殊に、イタリアの商業に一大進歩を與へたり。西ハリファ國 初めサラケン人の、イスパニアを略するやキリスト教徒は北方の山間に據りて獨立を持續せしが一〇三一年コルドバのハリファ國斷絶して其の版圖の數州に分裂せるに乗じ、レオン及カスナリア王はトレドを復し回教徒はアフリカより援兵を得て之を支へたり、然れども



十三世紀の上半に至り、レオン及カスチリア王は愈々南下してセビリヤ、コルドバを陥れアラゴン、ポルトガル兩王も亦半島の東西に領土を擴めサラケン人の領する所は僅にグラナダ一國に過ぎざりき。

擬十字軍 十字軍の一び起るや法王は異派のキリスト教を奉ずる者に對しても亦十字軍を説き十三世紀の初め佛國南部の、アルピジヤ人を討じたり、又其の頃東海の東岸に住せるプロシヤ人、リトワニア人等は尙キリスト教を奉ぜざりしかば僧兵は法王の命を受けて之を征し遂に、プロシアに土着しぬ。

#### 第四章 西ヨーロッパ諸國の内狀

#### 封建制度

封建制度は中世歐洲の一大現象にして初め

フランク人のガリアを侵略するや君主は臣下と共に征服せる地を分領せり、之を私領と云ふ其の後君主新に自己の私領を割き部下に與へて有事の日の忠節を約せしめたるあり之を食邑と云ふ而して臣下の私領を有する者の此の如き條件を以て更に之を自己臣屬に分與するあり或は一旦私領を君主に納れたる後食邑として受領するありかくて十一世紀に及びては西ヨーロッパ諸國皆封建制度の下に立つに至れり。  
かく食邑の源因は必しも一樣ならずと雖も要するに君主の土地恩賜を以て主眼とし食邑を授受するには嚴肅なる君臣の儀式を行へり君主は臣下を庇護し臣下は有事の日

君臣の關係

君主に従ひて出陣するの外財政上の義務あり時宜に應じて献金するを例とす。

封建制度の盛衰

封建制度の隆盛なりしは十字軍以前にあり蓋し此役諸侯の軍資を得んとして領土を賣り或は遠征中死亡して血統絶え遺領の國王に併せらるゝあり其の他王權の擴張市府の發達、火藥の發明によりて戰略を一變したる等皆封建制度の衰微を促せり。

騎士 騎士は封建制度の精華なり、凡そ騎士たらんと欲する者は幼少の時より貴女に仕へて禮節を習ひ、つぎて騎士に附隨して武技を修め二十一歳に至り嚴肅なる儀式を行ひ始めて騎士となる已に騎士となるや義俠勇敢を主とし、鰥寡孤獨を保護し宗教を守り婦女を敬するを任とす。

騎士は要害の地を選び堅固なる城寨を築きて之に據れり、十字軍の後騎士漸く跋扈し領内の人民を虐げ往來の旅客を脅す等亂暴到らざるなかりしかども封建制度に伴ひて起れるものなるを以て又之と共に衰へたり。

教權の全盛 中古キリスト教の勢力は全く西ヨーロッパ諸國民の精神界を支配せりローマ法王は最高の裁判官にして宗教裁判は各地に行はれ之に違ふ者あれば忽ち破門の令狀下り王侯の尊きと雖も、威嚴忽ち地に墜ち社會の擯斥する所となる、従ひて俗界の裁判に於ても宗教的儀式を交へ殊に疑獄の決し難きあれば或は熱湯を探らしめ或は熱鋤を踏ましむ之を神聖裁判と云ふ、世態此の如くなれば各地の寺院は皆廣大なる領土を有して封建諸侯と對峙し

僧侶或は皇帝の選舉に與かり或は宰輔となりて國政に參與せり。

律院は六世紀の頃イタリアの僧セント・ベネヂクトが建てたるを始めとし漸次各地に布設せられぬ、律僧はもと清貧敬虔、研學を以て一生を了するを目的とせしが年を経るに従ひ規律往々紊亂せしかば諸派、新に起り布教教育を力めぬ實に當時西ヨーロッパ諸國の公文律令はラテン語を用ゐしを以て僧侶の外之を解する者極めて少く爲に文權は全く僧侶に歸し哲學、文學、美術等皆宗教思想を帶びざるはなかりき。

市府の發達 初めゲルマニ人のローマ領に入るやローマ帝政時代に榮えし市府は概ね其蹂躪する所となりしが、八

世紀の末より漸く勢を復し、又新に所在商業の要地に勃興せる市府も少からず皆能く獨立を維持し或は帝王の保護を受け或は互に同盟を結び以て封建諸侯の壓を避けたり。就中十二世に於ける、イタリア北部諸市のランゴバルト同盟及十三世紀に於けるドイツ北部諸市のハンザ同盟は最も有力なりき。

### 第五章 東ヨーロッパ諸國 蒙古の入寇

東ヨーロッパ諸國 第四、十字軍はラテン帝國を建てしと雖も皇帝直轄の地は僅に舊帝國の北部及小アジアの西部に限りベネチアは西岸の小島ギリシアの南部及クレテ島を領し、エビロス王アテネ公、アカイア侯等殆ど獨立し、ニ

ケーア及トラベズントに據れるギリシア帝室の餘類は尙  
皇帝と稱し一二六一年ニケーアのミカエル・パライオロゴ  
ス帝再びコンスタンチノプルを得たり。

ブラザミル

ロシアは、イゴルより二傳してブラザミルに至り、ギリシア  
帝室と婚しキリスト教を傳へたりしが其の子、ヤロスラフ  
の代、聖書を露語に譯しギリシアの名工を招聘し多く寺院  
を建設し以て國都キエフを飾れり一〇五三年ヤロスラフ  
歿し支族遺地を分領して數國となり就中キエフの太公最  
も有力にして全國を總管し一一六九年以後はブラザミル  
太公之に代りぬ。

モンゴルの勃興 アムルの上流なるオノン、ケルレン兩

河の流域にモンゴルの一部落あり其の酋長テムヂン英邁

チンギスハ  
ンの盛大

にして能く兵を用ゐる四隣の諸部落を併せ一二一〇六年オノ  
ン河畔に即位してチンギスハンと稱しぬチンギスハンは  
爾來連年兵を出し南は西夏を屈し金を蠶食し西遼即ちハ  
ラヒタイを滅してホラズムと境を接せしが未だ幾ならず  
して之と隙を生じ一二一八年親ら諸子と共に六十萬の大  
軍を率ゐるホラズムを攻めて首府サマルカンドを陥れ別に  
チエベ、スプタイを遣り裏海の南を迂廻しロシアの南東に據れ  
るキプチャクを討たしめたり是に於て南ロシアの諸侯はキ  
プチャクの請に應じ同盟して、モンゴル軍をカルカ河上に逆  
撃せしも却て大敗しき。

バツの西征 チンギスハン歿するや第二子チヤガタイは

西遼の故地を得てチヤガタイハン國を建て第三子、オゴタイ

ハツの業

（太宗）は帝位を継ぎ都をハラホリムに奠め金を滅したる後姪ハツを元帥に任じ一二三六年春再び歐洲に向はしめたりハツ等先づブルガルに入り、モスクバ、キエフ諸市を陥れ是より本軍はホンガリアに向ひ別軍はハイツを將としてシレシアに進みシレシア公及ドイツ騎士の聯合軍をワールスタットに破り、モラウアを過ぎて本軍に會し進みてペストを抜き全軍將にドイツに入らんとせり、是に於てヨーロッパ諸國震駭しローマ法王は檄を飛ばして十字軍を勧誘せしが會太宗の訃音到りハツは兵を收めて諸將を國に還し自らボルガ河下流のサライに都しキプチャク即ち金黨國を建てたり。

フラグの西征 其の後蒙古は憲宗マングに至りフラグ

イルハン帝國ヲ建つ

をして南西アジアを征せしめたり、フラグ命を奉じて先づペルシア地方を平げ一二五八年バグダードを屠りて、アッバース朝最後のハリフマモスタシムを殺し進みて小アジアに入り、ルーム及トラベズンド帝國の聯合軍を破り其の朝貢を約せしめ又ニケーア帝をして好を通ぜしめ更にシリアを侵して、アレクソダマスクを取りきかくてフラグは悉く小アジア地方を平定し所謂イルハン國を建てぬ。

### 第三期 大空位時代より宗教改革まで

（紀元一二五六—一五一七年）

#### 第一章 イギリスとフランスとの交渉

イギリス、フランスの交渉 パリの首府となりし以來

ヘンリ二世の業

フランス王は數ノルマンデー侯と争ひしが、ウイレムの子  
ギリス王となるに及び延いてイギリス、フランス兩國の衝  
突となりぬ其の後プランタジネット家の祖ヘンリ二世のア  
ンジューより出でて王位に登りアクイタニアの公主と婚  
するやヘンリの領土は遙にフランス王の版圖を凌駕し軍  
備を整へ司法制度を改め又大に諸侯の權力を削れり但し  
宗教裁判の廢止につきては、カンタベリーの大僧正トマス・  
ベケットと争ひ之を殺したるも遂に法王權を削減する能は  
ざりき。

フランス領擴張せらる

フランスはフーゴ・カペーの子孫永く王位を繼承し銳意  
王權の伸暢を圖りしが、ライボ二世に至りイギリス王ジ  
アの暗弱暴虐にして人心を失へるに乗じノルマンデー  
アンジューとを奪ひルイス九世の代フランスの境域はイ  
ギリス海峽大西洋及地中海に至りぬ。

**大憲章** かくイギリス王ジョンはフランスに於ける領土  
を失へるのみならず國を擧げて法王に獻じ其の食邑とし

て之を領する等國威を損する事多かりしかば一二一五年  
諸侯僧侶等王に迫り大憲章を欽定せしめ古來の法律習慣  
を特書して人民の權利を明にせり、ジョン死して子ヘンリ  
三世立ち亦無道なり、シモン・ド・モンフォール大に民權擴張を  
唱へ王をして貴族僧侶の外州市の代議士を召集して議會  
を開かしめぬ之を英國下院の濫觴となす時に一二六五  
年なり。

パリアメントを設く

**佛國三民議會** フランスは、ルイス九世より二傳してフ

リボ四世の男系絶え姪フリボ六世王位に登りしがエドワルド三世は其母のフリボ四世の女なるを以て佛國王位を繼ぐの權ありとし佛人は、また多年利害を異にせし英國の議士を召集し其の贊助を得て以て法王に抗しき、是を佛國三民議會モニ・ミキローの嚆矢とす次で王はフランスの僧クレメンヌ五世を立てて法王とす爾後六十年餘法王は唯フランス王の隨使に従ひぬ。イギリス、フランスの衝突　イギリスはヘンリ三世の後エドワルド一世同二世を経て三世の時、會フランスはフリボ四世の男系絶え姪フリボ六世王位に登りしがエドワルド三世は其母のフリボ四世の女なるを以て佛國王位を繼承するの權ありとし佛人は、また多年利害を異にしたる英國の配下に立つを拒み茲に所謂百年戰爭フアン・ワール・ワールを惹起し

百年戰爭の  
原因

配下に立つを拒み茲に所謂百年戰爭フアン・ワール・ワールを惹起しぬ。

百年戰爭　一三四〇年イギリス艦隊は先づフランス艦隊を破り次で、イギリス軍はクレシー、ポアチエーの二大戦に勝てり是に於てフランス王は國の西半を割讓して和を講じたるも久しからずして破れ、フランス王カロロ五世は殆どアキテーニアの全部を恢復し、且つ艦隊を派してイギリスに侵入せしめたり其の子カロロ六世無道にして民望を失へるに乘じ時のイギリス王ヘンリ五世は兵を率ゐてフランスに入り一四一五年アゼンクールに大勝を博し、カロロの死後フランス全部を併すべきを約せり、然るに幾もなくしてイギリス、フランス二王共に歿しフランス人はカロロ七世尙太子たりしを奉じて恢復の策を講じたりしが偶、ジャンヌ・ダルク

フランス、ダ  
ルク出づ

ヨーク、ラ  
ンカスター  
の二黨

クと稱する一少女出で士氣を激勵して遂にイギリス人を  
國外に放逐しカレントの外悉く舊領を恢復し百年戦争終局  
を告げぬ時に一四五三年なり。  
薔薇戦争 是より先きイギリスはプランタジネット家絶  
えランカスター家之に代りしが百年戦争の後前朝の一支  
派なるヨーク家王位を覬覦し一四五五年以來三十年間國  
内ヨーク、ランカスターの兩黨に分れ互に薔薇を徽章とし  
て戦ひしがヨーク家遂に勝ちしも三代にして絶え一四八  
五年ランカスター家の一支派ナウードル家のヘンリ七世  
國內を統一して位に即きぬ。

## 第二章 古學の復興 活版の發明 兵制の變遷

煩瑣哲學 ヨーロッパ中古の學者は宗教の束縛を被りて  
萎靡甚しくギリシア哲學とキリスト教、教理とを混合せし  
煩瑣哲學起り眞理の根底を探らずして漫に論法を弄しぬ  
但しパリ大學オックスフォード大學等は此間に起りしと雖も  
當初は尙煩瑣哲學及ローマ法を主とし傍らギリシア語、理  
學等を教へしに過ぎざりき。  
文運の復興 當時ヨーロッパ文化の中心は東西に分れ西  
はサラケン人東はギリシア人の專有する所なりしが前者  
はイスパニアのキリスト教徒に屈し後者はトルコ人の爲  
に追窮せられ共に舊來の面目を保つ能はざるに方り、イタ  
リアは之に代りて文運復興の中心となりぬ。  
イタリアに於ては十三世紀の頃より、ギリシア、ローマの詩



人道派起る

諸大家

文法律を研究して知徳を開發せんとする人道派起り神聖喜劇の作者ダンテの如きも既に此流を汲めるや明なり十四世紀にはベネチア、ボカチオの徒出で頻に古典の語法思想を研究し又塵埃中に埋没せる古書の搜索を方めしがギリシア帝國の末路コンスタンチノブルの學者の遁れてイタリヤに來る者多かりしかば人道派は一層盛大となり次第に諸國に傳播し、ドイツのロイヒリン、エラスムス等は最も名聲を博せり。

活版の發明 文運の復興に與りて大に力ありしは活版の發明なり從來書籍は高價なる羊皮に謄寫して傳ふるのみなりしが一四四〇年頃、マインツの人グーテンベルヒ始めて活版を發明し、シニフル之に改良を施せり是に於てか書



籍を得るの途頗る容易となりぬ。

**兵制の變遷** 兵制の變化は封建制度の破壊に與りて大

に力ありき抑も騎士の突貫はヨーロッパ中古に於ける唯一の戦法なりしがスウイス人が長槍と戰斧ハキとを發明し之を以て能く突貫を防ぎ得しよりヨーロッパ諸國皆その法を傳へ

戦器の改造

火薬の發明

從來の騎士を廢し傭兵の制度を採用し殊にスウイス人を聘用せり、加之當時既に火薬の發明あり西ヨーロッパ人は之を兵器に應用するの法をサラケン人より傳へ大砲、拳銃、長銃等漸く使用せられ騎士をして顔色なからしめたり。

**美術の復興** 古代美術も亦古文學と相伴ひて復興し建

築家にはブルネレスコの如き彫刻にはミケランジェロあり繪畫は中古に於て最も拙劣を極めしが十五世紀の後半

より十六世紀の前半に亘り、レオナルド・ダヴィンチ、ミケランジェロ、ラファエール、ナチアノ等の諸名手輩出せり。

### 第三章 地理上の発見

地理的智識の進歩 十字軍の起るや、西ヨーロッパ諸國民

はサラケン人の地理的智識を輸入し、大に冒険の精神を發

輝し商人宣教師の東方に旅行する者益多く殊にイタリヤ

人マルコ・ポーロは一二七一年郷里ベネチアを出で陸路支

那に赴き元の世祖に仕ふること殆と二十年終に海路イン

ドを経て本國に歸り東方見聞録を著して盛にカタイ(北支)

マンシ(南支)シパンダ(本)の富饒なるを稱揚し大に西ヨーロッパ人

の遠征心を奮起せしめたり日本のヨーロッパ人に知ら

マルコ・ポーロ

れしは實に此時を初とす。

新航路発見の機運 然るにトルコ人の威を東方に振ふ

に及び、地中海の東岸は全く其の配下に歸じ、アレクサンド

リアのインド貿易も殆と廢絶するに至りしかば、インドに

達する新航路発見の必要は西ヨーロッパ諸國の輿論となり

加ふるに十三世紀の半頃支那より傳はりたる磁針は航海

者をして遠く大洋に航するの機會を得せしめたり。

インド航路の発見 ホルトガルの王子ヘンリは夙に航

路の擴張を圖り十五世紀の初め頻に船を派して、アフリカ

の西岸及大西洋諸島を探検せしめたり、一四八六年デアズ

はアフリカの南端に達し之をグード・ホープ岬と命名せし

が一四九八年バスコ・ダ・ガマはグード・ホープ岬を廻り遂に

デアズの遠航



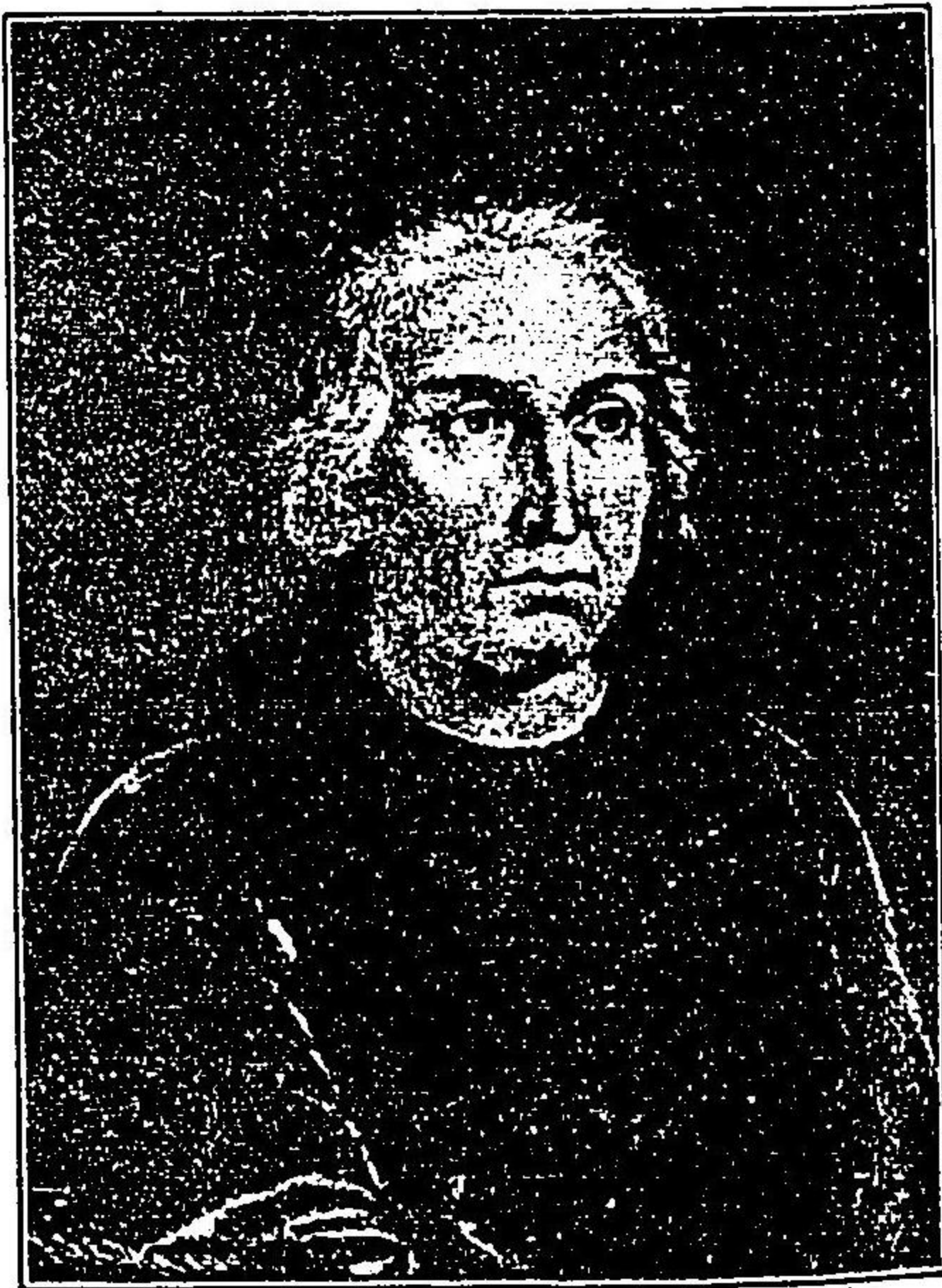
機刷印の年〇二五一



船船の代時見發加利米亞



ステルコ・ドンナルへ



スパンロコーアフトスリク

マアメリカ  
の名稱

コロンブス

インド沿岸のカリユに達し茲に始めて多年の宿望を遂ぐるを得たり。  
 アメリカの發見 是より先きイタリア、ジノバの人コロンブスはインド及ジバングに達するに西航するの捷路なるを信じイギリス王ポルトガル王等に説きしも皆用ゐられず漸くにしてイスパニア王フルヂナンド及其の後イサベラの賛助を得一四九二年小船三艘を率ゐ探檢の途に上るを得たり、コロンブスは太西洋を航すること八十六日にして始めて西インドの一小島に着せしが更に進んでキユバ、ヘーナ諸島を發見して歸れり、かくてコロンブスは前後四回の探檢を試み南米オリノコ河口に達したりしが尙新大陸なるを知らず、フロレンスの人アメリゴ・ベスプナの南

アメリカの  
名稱

米海岸を探検して其の記行を著はすに及び世人新大陸を  
アメリカと稱するに至れり。

#### 第四章 西ヨーロッパ諸國の中央集權

フランスの隆盛 百年戦争間フランスの王權は次第に  
發達し來りしが、カロロ七世に至り税法を改め常備軍を新  
設し子、ルイス十一世も亦父王の遺志を承け一に諸侯の撲  
滅を計れり、時にブルゴニ、公カロロ位に即くや常にルイ  
スの政略に反對し四方に敵を有せしが一四七六年スウイス  
同盟と戦ひて大敗し翌年遂に戦死せり是に於てか、フラン  
ス外の公領はカロロの女婿ドイツ帝マキシミアノ一世  
に歸しフランス内の公領は悉くフランス王室に歸しぬ。

ドイツノ形勢  
の改革  
の改革  
の改革

ドイツノ形勢 ドイツにては從來諸侯が任意に王を選ぶの權を有せしが一三五六年カロロ四世の時七大諸侯を選擧侯とし黄金文書を發して此を確認しぬ、後マキシミアノ一世は憲法を改良して國威を發揚せんと欲し帝國議會に諮りしが、マインツの大僧正ベルトルド等の議を容れ帝國を六區、後に十區に分けて國內の永久平和を圖り高等法院をフランクフルトに常設して各州の紛議を判決せしめ所得税を全國より徵收し、又始めて郵便法を定むる等中央集權に勉めしも一五〇四年ベルトルドの死するや改革黨の氣勢大に衰へ遂に此改革も中絶するに至りぬ。  
イギリス イギリスにては薔薇戰爭の時大貴族概ね斷絶しヘンリ七世の位に即くや貴族の蓄兵を禁じ星室廳

を設け租税或は徵收法を嚴にする等、貴族抑壓の策を回らし又大に商業を獎勵して外國と利益ある通商條約を結びければ國運隆盛に赴きぬ。  
イスパニア イスパニアに於ては一四六九年アラゴン王フェルヂナンドのカスナリア女王イサベラと婚するや二國竝に合し一四九二年兵を進めて、グラナダを平げ又幾もなくして、ナバラ王國を征しカスナリア及アラゴン王はポルトガルの外、全半島に君臨しイスパニア王と呼ばれるに至れり。  
ポルトガル ポルトガルはもとカスナリアの屬邦なりしが十二世紀の半頃獨立して一王國となりき一三八五年シアン大王位に即き、アフリカのサラケン人を討じ、アルガ

ーブと稱するキリスト教王國を建て又太子ヘンリは大に航海探險を獎勵しぬ。

### 第五章 宗教の頽廢

宗教の頽廢 法王のアビニオンに遷さるるやイタリアは新に一法王を選び互に相争ひて弊害百出せしかば一四〇九年宗教會議をピサに開き二法王を廢して別に一法王を立てき然るに二法王之を諾せず愈紛擾を加へしにより一四一四年ドイツ、イタリア、フランス、イギリス、イスパニア五國はコンスタンツに宗教會議を開き異端を禁壓し法王を一にし且つ教會内部の改革を實行せんとしたるも第三の問題に就きて各國議員間に軋轢を生じ新立の法王マル

ウイクリッフ  
フス出るも  
其功なし

チノ五世之に乗じて遂に會議を解散せり其の後一四三一年パーゼルに開かれたる宗教會議も亦内は黨争を生じ外は法王と衝突を起して閉會しぬ此間一個人として宗教の匡正を計り且つ教義の攻撃を試みたる者には英人ウイクリフ、ボヘミア人フス等ありしが皆目的を達する能はず百弊依然として存しき。

イタリヤ諸市 帝權の衰頽に乗じイタリヤ諸市は漸く相集りて數地方をなし或は君主政治を行ひ君主は其の領土をドイツ帝又は法王に納れ食邑として之を受領し且つ侯伯の尊號を受くるあり、ビスコンチ家のミラノ侯となりしが如し或はベネチアの如く溫和なる貴族的政治を行ひ又フレンツェの如く純然なる民主政治を行ふあり、フレンツェは

十五世紀に於てメヂチ家起り主權を握りしと雖も尙共和政治の外形を存し府は商業、文學、及美術の中心となりぬ。ローマは法王のアピニンにあるやその間紛擾甚しく一三四七年リエンチ一時共和政治を布き自から監督官となりしが、コンスタンツ會議以後法王は専ら政權を得るに力め十五世紀の末に於ては毫も俗界の君主と異なる所なかりき、此間兩シチリア王國は依然として分裂しイタリア本土に於けるシチリア即ナポリ王國はアラゴン家とアンジュー侯とにて相争ひしがアンジュー侯のフランス國王族なるにより更にアラゴン家とフランス王との確執を來し而してシチリア島は遂にアラゴン王國に合併しぬ。

## 第六章 オスマンリトルコの跋扈

### 北ヨーロッパ諸國

オスマンリトルコ人 オスマン族はモンゴルの壓迫を被むるに及カスピ海東岸の故地を棄て、アルメニアに移りしが一二八八年部酋オスマン始めて獨立を唱へしより漸次小アジアに於けるギリシア帝領を併呑し又捕虜とせる、キリスト教徒の男兒を養育してイニチリと稱する勇猛なる軍隊を作れり一三六一年ムラド一世アドリアノブルを陥れて之に都し更にセルビア、ブルガリアを略せしが子バザンツト一世に至り益侵略を逞しくしギリシア帝國の版圖は唯コンスタンチノブルとマケドニア及ギリシアの邊境とに止りぬ。



チムルレンク 是より先きチアガタイハン國は内亂外寇相踵ぎ國威痛く衰へしかば、チンギスハンの後裔と稱せるナムルレンクは機に乗じて兵を擧げ一三六九年悉く國內を一統しサマルカンドに都し更に兵を西してイルハン國を併せ又トクタムシを助けて、キプチクハンたらしめき已にしてナムルレンクはトクタムシと隙を生じ兵を進めて之をボルガ河畔に破り侵掠を恣にして歸國し尋でインドを伐ちしがギリシア皇帝の救を請へるに會し大擧してトルコ人を攻め一四〇二年バダシンドとアングラの野に戦ひて之を虜にしき其の後ナムルレンクは明を襲はんとせしも一四〇五年病を獲てオトタルに歿し大國忽ち瓦解の止むなきに至れり。

東ローマ帝  
國滅ぶ

東帝國の滅亡 アングラの敗後トルコは内訌頻に起りしがムラッド二世に至り國勢再び盛大となりぬ子ムハメッド二世賢明にして雄略あり一四五三年コンスタンチノプルを圍むこと五十三日最後の皇帝バライオロス戦歿して東ローマ帝國茲に滅びギリシアの大部及トラペズント帝國も亦爾後數年を出でずして悉くトルコの併す所となりぬ。

ロシア、ポーランド及ホンガリア ムラッド一世のセルビア及ブルガリアを略してホンガリア及ポーランドと境を接するや二國は極力防禦を試み殊にホンガリア王シギスモンドは一三九六年ドイツ、フランスの騎士數萬を率ゐニコポリを圍みしもバダシンドの爲に大敗を被りき當時ポ

ロシア獨立

イラントはプロシアを併せ又久しくキプナクの制壓を受けたるロシアは一三二八年モスクバを首府としてより稍國勢を恢復しイバシ大帝の時全くキプナクの羈絆を脱するを得たり。

スカンヂナヴィア スウェーデン、ノルウェー、デンマルクの三王國は一三九七年カルマル合同の規定に従ひデンマルク王ワルデマル三世の女マルガレタを戴きしより三國が同一君主を有するの制は時に中止ありしと雖も殆と百年に亘れり一四四八年オルデンブルグ家のキリスチアン一世王位に即き以後デンマルクは今日に至るまで又ノルウェーは近世紀に至るまで其の子孫を奉じぬ。

### 第三編 近古史

#### 第一期 宗教改革よりウエストファリア

條約まで (紀元一五一七年—一六四八年)

#### 第一章 宗教改革

ルーテルの蹶起 宗教の頹廢は依然として舊態を改めざるに法王は毫も之れが革新を試みず却て宗教會議又は各國政府が撰定せる改革案に反對せり十六世紀の初め法王レオ十世贖罪符インデュルグエンスを販賣し人若し淨財を法王に喜捨すれば既犯未犯の罪業を免れ得べしと云ふに至りセント・アゴスチン派の一僧にしてウイテンベルヒ大學の神學教授なるマルチノールは一五一七年抗議九十五條を草し、ウイテ

贖罪符の販賣

ルーテルの抗議

ンベルヒの寺門に掲げ贖罪符販賣の非理なるを辨明せり  
 此説忽ち四方に傳はり賛否の聲囂々たりしが、ライプナヒ  
 の公開討論に於てルーテルは基督教義の一に聖書に據る  
 べきを切言し、且つ法王と雖もまた全く過失なき能はざる  
 を明言しければ法王は一五二〇年遂にルーテルを破門せり。  
 ウルムスの國會 是時に當りドイツ帝位に上りたる、カ  
 ロ五世は宗教改革説を鎮壓して法王の歡心を買はんと  
 欲し、一五二一年ウルムスに國會を開き、ルーテルを召して  
 其所説を棄てしめんとせり然るに、ルーテル固く持して命  
 を奉せず遂に敕令によりて法律の保護を停止せられしが、  
 サクソニア侯フレデリキの庇護を得てワルトブルグ城内  
 に隠れ聖書の翻譯に従事せり、

プロテスタ  
 ント派

南ドイツの騷擾 カロロ五世がイタリア事件に關しフ  
 ランス王フランシス一世と兵を交ふるに及び新教の勢益  
 熾なりしが其間ウイテンベルヒには再洗禮の必要を唱導せ  
 る再洗禮派起り、ライン河畔には騎士の暴動起り又南ドイ  
 ツには農民の一揆起り共に宗教改革を口實として狂暴を  
 逞しくせり、然るにルーテルは常に過激、極端の行爲を排撃  
 せしを以て是等暴動の鎮定後北ドイツの諸侯諸市は概ね  
 新教に傾き、カロロ五世の一五二九年スパイエルに國會を  
 開き新教禁止を議決するや之れに抗議して止まざりより  
 新教徒を稱してプロテスタントと云ふに至れり。  
 トルコの入寇 トルコ帝ムハメッド二世は一四八〇年イ  
 タリアのオトラントを陥れ愈西侵の勢を示ししが、翌年病

歿して經營半途に挫折せり然れども曾孫スレイマン一世に至り遺圖を繼承して、ローヅ島を略し又ホンガリアに攻入り、ホンガリア兼ボヘミア王ルイス二世をモハナに破りて之を殺しぬ、是に於てカロロ五世は弟フルヂナンドを立て、ホンガリア兼ボヘミア王となししにホンガリアの貴族ツボリア之と王位を争ひて援をトルコに求めフランスも亦窃にスレイマンを煽動する所あり一五二九年スレイマン大舉してオーストリアに侵入し進みてウーインチ圍みしかば新舊兩教徒は黨争を中止し相一致して皇帝を助け終にトルコ人を撃退したり。

アウグスブルグ國會 一五三〇年皇帝親臨して、アウグスブルグに國會を開くや新教徒はルーテルの友人メラ

シマールカ  
ルデンの同  
盟

ンヒトンが編纂せる、アウグスブルグ信仰個條を奉呈せしに國會の多數は依然として新教排斥の方針を執りしかば新教徒は一五三一年シマールカルデン同盟を結びて自ら衛りぬ。  
然るに翌年スレイマンは復大舉して、オーストリアに攻入りければ皇帝は急に新教徒とニルンベルヒに和を結び次回の國會まで一時信仰の自由を許し尋でトルコ人をオーストリアより退けり。

### 第二章 イスパニアとフランスとの對抗

イタリア戦争 イタリアは十五世紀の末に當りミラノ、ベネチア、フィレンツエ法王領ナポリの五國分立對峙し、内は軍

備を整へ外は外交術を用ゐて均勢を保ちき就中ベネチア、  
フィレンツェは外交術の祖と稱せられ、卒先して公使を派し、其  
國の政況を視察報告せしめたり。

權力の平均

イタリヤ諸邦君王間に於ける結婚は均勢を保つの一  
大要件たりしが、ミラノ公ルイス・スフォルツァは、  
フィレンツェ、ナポリの聯合して己を圖るを知り、援を佛王カロロ八世に請へり、  
一四九四年カロロ兵を率ゐてイタリヤに入り、容易にフィレン  
ツェ及ナポリを平げしかば、ベネチア、法王、ドイツ帝マキシミ  
リアノ、イスパニア王フェルデナンドと相合してフランスに  
抗しフランス王をして其侵地を棄てしめき、是れを優勢な  
る敵に對するヨーロッパ列國同盟の初めとす、爾來フランス  
は、ルイス十二世フランス一世の二代に亘り、イスパニア

とイタリヤの覇權を争ひて干戈絶ゆる間なく、一五一一年  
法王、ドイツ、イスパニア、イギリス及ベネチアは神聖同盟を  
結びてルイス十二世に對抗せり。

カロロ五世 一五一六年イスパニア王フェルデナンド死  
して外孫カロロ繼ぎ、カロロ一世と稱せしが後三年祖父マ  
キシミリアノ帝死するに及び、更に帝位に登り、カロロ五世  
と稱しぬ、カロロは父母兩家の版圖即ちイスパニア、サルヂ  
ニア、ナポリ、シチリア、アメリカの新領土オーストリア及ネ  
ーデルラントを併有し其領域の廣大なる、カロロ大帝以後  
稀に見る所なりき。

ドイツとフランスとの紛争 是よりイスパニア、フラ  
ンス二國の確執益甚しく、カロロはウルムス國會の閉會後



世七スレク王法



世一スシラフ



PROGENES L. V. QUINTVS · SIC · CAROLVS · III ·  
IMPERII · CAESAR · ROMANA · ET · ORA · TVLIT  
ATA · SVAE · XXXI  
ASEP · M · IS · XXXI

世五ロロカ



ルテール・ンナルマ

直に兵をイタリアに進め一五二五年フランス王を虜にし、翌年マドリッド條約を結びフランス王をして、ミラノ及ナポリに對する要求を棄て、且つ、ブルゴニーを割讓せしめたり然るにフランス王は歸國後敢て條約を守るの意なく法王、イギリス及イタリア諸邦と結びてカロロに抗せしかばカロロ大に怒りローマを陥れて殺戮掠奪を極めき、一五二九年カンブレの約成りフランスはイタリアに對する要求を棄て、カロロは一時ブルゴニーに對する要求を棄て、翌年ポロニアに於て帝冠及イタリア王冠を戴きぬ、是を法王授冠の最終とす。

已にしてトルコ人のオーストリアを侵すや、フランス一世は遙に之に應援し又チャニス、アルジェリアに據れる海賊はトル

コ人と結托して地中海を横行せしかばカロロは一五三五年  
年ナニスを平げ、翌年大舉してフランスと戦ひ和成りて後  
アルジェリアの征討を企てしも颶風に遭ふて果さゞりき、當時  
フランス王はまたトルコ、デンマルク、スウェーデンと結びド  
イツ帝と戦ひて互に勝敗ありしが、一五四四年クレピの  
條約を締結しナポリ及ミラノは遂にイスパニアの手に歸  
しぬ。

イタリア諸州 以上の諸戦により、イタリア諸共和國の  
衰微甚しく、フレンツは公國と變じ、メヂチ家を戴き、シエナ  
共和國を併せ一五六九年トスカナ大公國と成り、共和政治  
を維持せるは僅にベネチア、ジエノバ等に止まり、皆舊時の盛  
觀を存せず此間、法王は詐略權謀を行ゐて憚る所なく一意

俗權の増大を圖りしかど、イスパニア王に對しては常に其心を買ふに汲々たりき。

### 第三章 シツマルカルデン戦争 宗教

#### 改革の反動

シツマルカルデン戦争 ニルンベルヒの和議は、カロロが一時の窮策に出でしものなるを以て新舊兩派の衝突は依然として存せり、クレビーの和成るや、カロロ、トレントに宗教會議を開きしに新教徒の出席する者無かりしかば大に怒り兵力を以て之を壓伏せんと企て先づ南ドイツの新教諸邦を従へ次で新教徒の首領サクソニア侯フレデリキを虜にし、サクソニア家の支派なるモリスを擧げてサクソニア選舉侯となせり、然るにモリスは久しからずして窃に

新教徒及佛王ヘンリ二世と通じ、内外より帝を攻めければ帝は僅に身を以て免れ一五五五年更にアウグスブルグの宗教會議に於て新舊兩教徒に同様の權利を與へぬ。

翌年カロロ位を去り、弟フルザナンドを推して帝位に即かしめ又子、フリポにはイスパニア王號と其所領とを與へぬ、是をフリポ二世と爲す。

ツウイングリールーテルの宗教改革を唱導するに及びナーリヒの僧ツウイングリールも亦贖罪符の販賣を攻撃せり然れども其説く所ルーテルに比して稍過激なりしかば兩派遂に一致する能はずナーリヒ、ベルン、バーゼル等はツウイングリール派に屬し、舊教を墨守せるシツワイツ、ウリート等と戦ひ、一五三一年ツウイングリール遂に戦歿せり、



カルビン 當時フランスに於ける宗教改革運動はパリ  
 大學の爲に痛く抑壓を被りしかば難をドイツ、スウイスに避  
 くる者多く、就中カルビンはジネーブに來りて宗教制度を  
 定めき、かくてカルビンの黨與は、ジネーブに根據地としてフ  
 ランスに入り、オランダ及スコットランドに蔓延し殊にスコト  
 ランドに於ては、ジアン・ノクス此教旨を主張し遂に一派を  
 創めき、プレスビテリアン教と稱するもの是なり其他イギ  
 リス王ヘンリ八世は皇后廢立の件に就きて法王に反しデ  
 ンマルク、スウエーデン及ノルウエーに於てはルーテル派勢を  
 得たり。

宗教改革の反動 かく新教が破竹の勢を以て將に悉く

ヨーロッパのキリスト教世界を席卷せんとするに當り、イタ

プレスビ  
リアン

イグナチオ  
スヨラの  
エオ  
教會

リア及イスパニアに於ける反對運動も亦活潑となれり即  
 ちイスパニア人イグナチオ・ロヨラは一五四〇年エスイタ  
 教會を組織し幾多の宣教師を海外に遣り又少年子弟を教  
 育して舊教の勢力を張らんとし、トレントの宗教會議は全  
 然新教を目して異端なりとし宗教裁判の制を設けて之れ  
 が撲滅を圖りぬ而して以上の外更に新教の傳播に大障  
 碍を與へたるはイスパニア王フィリポ二世の經綸なりとす。  
 フィリポ二世は夙にイギリス女王マリアと  
 婚し佛王ヘンリ二世と戦ひて許多の城寨を取り一五七一  
 年トルコの艦隊をレバントに撃破し、一五八〇年ポルトガ  
 ル王室の斷絶に乗じてポルトガル及東インドに於けるポ  
 ルトガル領を併せぬ此の如く當時ヨーロッパの最強君主な

りし、フィリポは實に自ら舊教徒の盟主を以て任じ、内は宗教裁判所を開きて新教徒及ムーア人を迫害し外はイギリス、フランス二國に干渉して二國の舊教を維持せんと圖りき。

#### 第四章 ポルトガル イスパニア

##### の殖民政策

ポルトガル人の東航 バスコ・ダ・ガマのインドに達せしより胡椒、肉桂、藥草等の商業は全くポルトガル人の手に落ちぬ、是れを以て從來インド貿易に關して利益を收めたる回回教徒の商人は、カリコ王と結び、ポルトガル人に妨害を試みしが、ポルトガル人は之に屈せず最初のインド總督アルメイダは數回回教徒を破りインドの西岸に數市を得

支那及日本と通ず

たり一五〇八年アルブケルケ代りて總督となりゴアを略取して此に總督府を置き尋でセイロンを周り、マラカを取リシム、モルッカ諸島と交通を開き又西に航してオルムスを取れり爾來ポルトガルは益、東進の策を用ゐ一五一七年始めて、カントンに至り其後四十年にしてマカオを永代借地するを得専ら此地に貿易を行へり、而して我日本との交通は一五四一年ポルトガル商船の大隅種子島に來りしを以て發端となすべし。

イスパニア人の東航 此間イスパニア人は西方に航

して東洋に達せん事を試み一五一九年マガリアエンスは南アメリカに航し、マガリアエンス海峡を通過して太平洋に出でフィリピン諸島に至りて土人の殺す所となりしが、其徒グ

世界を一周す

ードホープ岬を廻り、一五二二年初めて世界を一週してイ  
スパニアに歸りき、かくてイスパニア人は遂にフリピン諸  
島を領しマニラを根據地となし、一五八〇年我平戸港に來  
航せり。

イスパニア  
殖民地の擴  
大

イスパニア人の西航 然れども、イスパニア人が主と  
して征服殖民を試みたるは新大陸にあり就中メキシコ及  
ペルーは開化稍進み且つ頗る金錢に富みしかば、コルテス  
は一五一九年メキシコに入りてこれを滅し、ピサロは一五  
三一年ペルーに入りこれを平げぬ、十六世紀の半頃に及び  
カリフォルニア、フロリダ以南の沿岸は皆イスパニア殖民地  
を以て充たさるるに至りしが、獨りブラジルはポルトガル  
人の發見する所となりぬ。

キリスト教の傳播

舊教徒就中エスイタ派は新教徒  
の爲に失ひし勢力をヨーロッパ以外に恢復せんと欲し常に  
冒險的發見者の後に從へり、ロヨエの同志ザビエルは一  
五四二年ゴアに來りマライ群島を経て更に日本に分教し  
マテオリッチの徒は支那に布教し、又イスパニアの僧ラス・カ  
サスは一五〇二年西インド諸島に航しメキシコに移り布  
教の傍大にイスパニア人の土民虐待を止むることに奔走  
しき。

殖民政策

要するにポルトガル、イスパニア兩國の殖民  
政策は、徒に殖民地の利益を吸收するに力め土民を統御す  
るに恩威並ひ行ふと云ふこと無し故に兩國の繁榮は一時  
人目を眩せしと雖も、永續するを得ず、却て本國に於ける製

造業の衰頹を見るに至れり。

### 第五章 オランダの獨立

#### ネーデルラントの叛亂

ネーデルラントはカロロ五世の歿後、イスパニア王の領土となりしが、宗教改革に際し國人の舊教を去りて新教に入る者少からず、フリボ二世が義妹マルガレタを此國の總督とし、宗教裁判所を設けて新教徒を抑壓するや、貴族は信仰の自由を哀訴し、亂民は所在に蜂起して舊教寺院を破壊せり。是に於て反抗せる貴族を刑し、新教徒を嚴罰せしめければ、國人は激昂愈甚しく、オランダ公ウ、ルレムを推して盟主とし、援をドイツ諸侯に借りて公然叛旗を翻し、互に勝敗ありき。

オランダ

南北の分離 已にしてバルマ公の苛政を改むるや、南部諸州は自治を約して歸順せしと雖も、北部の諸州は一五七九年ユトレヒト同盟を結び、次で獨立を宣言し、ウ、ルレムを戴きて世襲の總督とせり。今のオランダ即ち是なり。蓋し南部諸州には舊教徒多く、北部諸州には新教徒多く、人種言語風俗も亦南北によりて相違あれば、其分離は數の免れざる所と云ふべし。

オランダの獨立 其後ウ、ルレムは刺客の手に斃れしと雖も、國民は其子、モリスを奉じ、イギリスの援助を得て屢西軍を破り、一六〇九年を以て十年間の休戰條約を結びしが、一六四八年のウ、エストリア條約に於てオランダは遂に純然たる獨立國として公認せられぬ。

東インド商會を設く

オランダ人の東航 初めオランダ人はイスパニア、ポルトガル二國に至りて、其殖民地の産物を購ひ之を北方の諸國に輸入せしが、其イスパニアに反きて獨立を唱ふるや會、イスパニア、ポルトガル二國は相續によりて合併せしを以て、復轉賣の利を専らにする能はざりき、是に於てオランダ人は直接に東洋貿易に従事し、一六〇二年東インド商會を組織し、幾多の艦船を東洋に派し到る處兩國の殖民地及商船を掠め、シバにバタビア府を建て、根據地とし、モルッカ諸島マラカ、セイロンを略し、漸次インドの西岸なるポルトガル領を奪ひ一六五〇年グード・ホープ岬に殖民地を置き又遠く支那日本に於てもポルトガル人と商利を争ひ、一時臺灣を占領せしが一六六一年鄭成功の逐ふ所となれり而し

日本と通商す

て日本に於ては一六三九年外人來朝を禁ずるの令出でたれどもオランダ人のみは依然長崎に於て通商すること許されたり。

### 第六章 イギリスのチャードル朝

ヘンリ八世

イギリス教會の分離 大陸に於ける宗教改革の餘波は直に延てイギリスに及びり當時ヘンリ八世は尙熱心なる舊教信者なるを以て親ら書を著はしてルーテルの新説を駁し、法王レオ十世より信仰の保護者と云へる賞詞を得たり其後、王は后カタリナを離別してアンナ・ボレインを娶らんと欲し、之れを法王クレメンヌ七世に諮りしに、法王はカタリナが、カロロ五世の叔母に當れるを以て躊躇遷延して

容易に決せざりき因てヘンリは、カンタベリーの大僧正クランマーをして離婚の正當なるを判決せしめ、遂に之れを廢してアンナ・ボレインと婚し、國會は又國王を以てイギリス教會及僧侶の首長とし全くローマと分離せり。

アングリカン教　ヘンリ八世はローマ教の管理を脱せしと雖も未だ新教の教義に據れるにあらず、子エドワルド六世は大僧正クランマーの補佐を得て新教の教義に法り又祈禱書を作りしが王歿して異母姉マリア立つや深く舊教を信じ、イスパニア王フィリポ二世と婚し法王權の恢復を認め、クランマー以下の新教徒を火刑に處し又イスパニアと聯合してフランスと戦を開きぬ、一五五八年異母妹エリザベタ繼ぐに及び舊教寺院を廢絶し、アングリカン教を以

て國教とせり。

イギリスとスコットランドとの關係　是より先き、マリアの歿するや、舊教徒はスコットランド女王マリアを迎へ立てんとして成らざりしが其後マリアは新教徒を抑壓し且つ内行修らず、國人の逐ふ所となりてエリザベタに依れり、エリザベタ之を幽閉すること十八年會、マリアの登極を欲する舊教徒等イスパニアと通じて窃に廢立を謀りしかば、遂に之を死刑に處せり。

マリアを殺す

必勝艦隊　エリザベタは極力フィリポ二世の政略に反對し、或はネーデルランドの叛亂を助け、或は西インドを侵ししかば、一五八八年フィリポは必勝艦隊を派遣してイギリスを襲へり、英將ハワード及ドレークはイギリス海峽に逆撃

イギリス海  
上権を得

して大に之を破り、イスパニア艦隊は遁れて北海に走り、又  
颶風に遭ひて概ね沈没せり。爾來海上の霸權は全くイギリ  
スに歸し、航海殖民の業隆然として起りしが之に反してイ  
スパニアは權勢一朝にして衰へ、國庫は缺乏し、人民は戰爭  
に疲れ、フリポの歿後久しからずしてポルトガルは獨立を  
恢復しき。

### エリザベタ朝の文學

エリザベタ在位四十五年其間  
イギリスの發達は極めて著く殊に文學に於ては所謂エリ  
ザベタ朝の文學をなしシ。クスピアは悲劇三十七編を作り  
て詩界の大王と稱せられ、スベンサーは仙女王フェアリーを歌ひベ  
ロンは歸納法を創めぬ。



王女タベザリエ  
牌念紀の隊艦勝必

## 第七章 フランス宗派の争

ユグノー 佛國の新教徒をユグノーと云ひ、カルビン派の新教を奉せり。フランシス一世及ヘンリ二世はハブスブルグ家に反抗せしが爲に他國の新教徒に應援せしと雖も自國に於ては百方ユグノーを抑壓せり。

フランスの内訌 ヘンリ二世歿するや、其三子フランシス二世カロロ九世、ヘンリ三世相次ぎて位に登りしが皆幼弱にして在位久しからず、政柄は常に母后カタリナの手にありき、此時に當りギーズ家は舊教徒の首領として威福を專にせしかば、カタリナは新教徒に幾分の自由を許して之に對せしめたり、是に於て舊教徒の激昂甚しく、終



バルトロメ  
の殺戮

に兩教徒の間にユグノー戦争始まり一はローマ及イスパ  
ニアより一はスウイス、ドイツ及イギリスより應援を得、紛争  
久しくして決せず、カロロ九世イスパニアの強大なるを忌  
み新教徒の首領なるコリニを宰相に任じ、王妹マルガレ  
タをブルボン家の出にして新教を奉せるナバラ新王ヘン  
リに嫁するを約しき然るにカタリナはコリニを悪み、之  
を暗殺せんとして成らず却て新教徒の激昂を招きしかば  
王に迫りて新教徒鑿殺の命を發せしめ、一五七二年八月セ  
ントバルトロメ祭日の夜を期しパリ市内の新教徒殺戮に  
着手し國內各地も亦之に倣ひ數日にして新教徒三萬人を  
殘殺せりと云ふ。

ブルボン朝 已にしてヘンリ三世立ち新教徒を遇する

ナントの勅  
令

こと寛裕なりしかば舊教徒之を憚はず國內紛亂して寧歳  
無く、ギーズ公の驕恣益甚しかりき、因てヘンリは人をして  
之を殺さしめ新教徒の軍に投じたるも後舊教の一僧侶に  
弑せられて、バロア家絶え、ナバラ王ヘンリ位に即きてヘン  
リ四世と稱しぬ、是をブルボン朝の祖とす、時に一五八九年  
なり。

ヘンリ四世は初め新教を奉ぜしと雖も深く國內の狀勢を  
察し、自ら舊教に改宗して舊教徒を和げ、又一五九八年ナン  
トの勅令を發して信仰の自由を許し六十年餘の内訌を平  
定せり時に名相シリイあり、王を助けて財政を整理し王權  
を固定し、フランス漸く隆盛の域に入らんとす。

### 第八章 三十年戦争

戦争の主眼

三十年戦争　ドイツに於ける宗教改革の紛擾はアウグスブルグ會議を以て一旦局を結びしと雖も、尙鬱勃として内部に蟠り、一六一八年を以て破裂し延てヨーロッパ全部に及び、戦争三十年の久しきに亘れり是を三十年戦争と云ふ其主とする所は新舊二教の競争に伴へる土地及權力争奪の競争たるに外ならざるなり。

ボヘミアの亂　ボヘミア及ホンガリア二州は元來新教徒の勢力の盛なる地なりしにマチアス帝の従弟フェルゼナンドを推して二州の王となすや、王は熱心なる舊教信者にして痛くボヘミアの新教徒を抑壓せしかば、一六一八年州

人遂に叛旗を翻しぬ。

翌年フェルゼナンド入りて帝位を継さしかば、ボヘミア人は新教徒同盟の首領なるフルツ選舉侯フレデリキ五世を迎へて王とせり、然れども戦遂に利あらず、フレデリキはボヘミアを逐はれ併せて其領土を失はり。

デンマルクの干渉　當時デンマルク王キリスチアン四世はホルスタインを領して亦ドイツの一諸侯なりしが、ドイツ新教徒の慘状を見るに忍びず、イギリス、オランダ二國の後援を得兵を率ゐて下サクソニアに侵入せり、ドイツの勇將ワレンスタイン、ナリー等屢デンマルク軍を破り長驅して敵の本國に入りしかば、デンマルク王は已むを得ず一六二九年リッベックに和を結び爾來ドイツの國事に干渉せざ

ワレンスタイン

るべきを誓ひ僅に其舊領を恢復することを得たり。  
 スウェーデンの干渉 フェルギナンドが戦勝の勢に乗じ新  
 教徒を抑圧すること益甚しきに至り、スウェーデン王グスタ  
 フアドルフはフランスの宰相リシャールより軍資の補助を  
 得一六三〇年急にドイツに入れり、時にワレンスタインは  
 讒に遭ひて黜けられしかば、グスタフは向ふ所敵なく、ポ  
 ラニアよりポヘミアに進み、ブローグを略し、軍威甚だ振ひ  
 め是に於て帝復ワレンスタインを擧用し、一六三二年兩軍  
 リッペンに會戦し、スウェーデン軍大に撻ちしと雖も其王を失  
 へり。  
 フランスの干渉 グスタフの戦死するや新教徒は一時  
 挫折せしと雖も、ワレンスタインの殺さるに至り漸く勢を

ウエストファ  
 リア條約

復し、スウェーデンは依然として戦争を繼續し、フランスは新  
 に公然ドイツと兵を交へき。

ウエストファリア條約 フェルギナンド及リシャール相次で歿  
 し遂に一六四八年のウエストファリア條約を以て此の戦争の  
 局を結びき、之によりてドイツ諸州は皆自治の權を有し新  
 舊二教共に同等の權利を得、フランスはメッス、ツール、ベルダ  
 ン及エルザスの大部分を取り、スウェーデンはポメラニアの  
 大部分及其附近の地を領し、ドイツ國會の一員となり又オ  
 ランダ、スウィス二國は獨立を公認せられたり。

ドイツの衰頹 三十年戦争はドイツに於て最も慘憎た  
 る結果を呈し、人口は三分の二を減じ、都府は零落し、田園は  
 荒蕪に歸し、商工業は萎靡し、文學技藝の類皆衰へ國家の統

一は散漫となり、三百餘の諸侯は各獨立の觀を呈しき。

### 第二期 ウェストファリア條約より

フランス革命まで

（紀元一六四八年—一七八九年）

### 第一章 フランス國家主義の確立及

#### 外國侵畧

リッパリ 佛王ヘンリ四世の弑せらるるやルイス十三世幼冲にして位に登り母后政を聽き内外の政務漸く弛廢せしが大僧正リッパリ宰相となるに及び内は新教を抑壓し貴族の權利を殺き、外はハプスブルグ家に反抗し或は三十年戰爭に加はり、或はポルトガルの叛徒を助けてイスパ

ニアを侵せり。

マザレン リッパリ、ルイス相次で歿し次王ルイス十四世年僅に五歳なり大僧正マザレン政柄を握り、リッパリの遺業を紹述し内は不平貴族を鎮壓し外は領土を擴張し又西王フイリポ四世の女マリアテレサを納れてルイスの后となすを約しぬ。

マザレン位に在ること殆と二十年、一六六一年を以て歿せしと雖も、フランスの中央集權は當時已に完成し、ルイス十四世は爾後復宰相を置かず親しく萬機を總裁し朕は即ち國家なりと誇稱し、人材を登用し制度を改め工藝を興し又文學を奨励し、殊に財政整理の任に當れるコルベールは經濟の才に長じ冗官を淘汰し租税を輕減し又所謂保護貿

ルイス十四世の功績



ルイ十四世

易策を取り、輸入品に對しては重税を課すると共に國內の製造業を保護し通商航海を擴張せり。

第一外侵

一六六五年<sup>七</sup>イスパニア王フィリポ四世歿し、子

カロロ二世立つや、ルイスは、フィリポの女婿たるの故を以てイスパニア領、チーデルランド即ち今のベルギーの地を受領すべきの權ありと稱し兵を發して之を占領せり是に於てオランダはフランスと境を接せんことを恐れ、イギリス及スウェーデンを誘ひ三國同盟して、ルイスに抗せしかば、ルイスは已むを得ず一六六八年アーヘンの條約を結び悉く其侵地を返し、佛國國境に接近せる數市を併せぬ。

第二外侵

ルイスは<sup>十</sup>深く三國同盟の主唱者なるオランダを怨みイギリス、スウェーデン二國に説きて同盟を結び遂

に親ら大軍を督してオランダに侵入し、連に諸州を陥れた  
り、オランダに侯ウ、ルレム三世國人を鼓舞してフランス軍を  
支へ、又巧にフランス同盟諸邦を離間し却てイスパニア、ド  
イツ、イギリス諸國の應援を得るに至りしかば其戰場は子  
ーデルラント、ライン河畔、イギリス海峽、地中海、及アメリカ  
沿岸に擴り、互に勝敗あり一六七八年ナイメーヘンの條約  
成りオランダは全土を恢復し、佛國は西國よりフランス、コ  
ンテ及チーデルラント境上の數地を得たり。  
**ナント勅令の廢止** 當時新教徒の往々王命に抗する者  
あり、一六八五年ルイスがナントの勅令を廢し新教徒の移  
住を禁ずるに及び、約五十萬の信徒は、オランダ、イギリス、ブ  
ランデンブルグ等に遁れしが是等は概ね商工業者にして

且つ巨額の資産を携帶し去りしにより佛國の損害甚しかりき。

### 第三外侵

是歲フルツ選舉侯死して嗣無し然るに侯の妹はルイスの弟オルレアン公に嫁せるを以て、ルイスは義妹の繼承權を主張し兵をフルツに出せり、ドイツ、イスバニア、スウェーデン等先づ同盟して之に當り、次でイギリス、オランダ二國も亦同盟に加はりき、一六九七年リスウイクの和議成り列國互に其侵地を交換し、フランスは悉くエルザス地方を得たり。

外國侵略の結果

### フランスの強盛

ルイス十四世の代フランスは威大に揚り驕奢また比なくベルサイユ宮廷の華美はヨーロッパ諸國を風靡して其聲に倣はしめ、爾來バリは好尚流行の中心

文士

となれり、又フランス語フランス文はリシャリーのフランス學士會院を設けしより雅潤の城に進み、ラシーヌ、コルネイユ、モリエールの三大劇作家出で、所謂フランス文學の黄金時代を爲し爾來フランス語フランス文は國際上の言語文章としてヨーロッパに用ゐらるるに至りぬ。

## 第二章 イギリスの革命

### 王權神聖説

エリザベタ女王は終身獨身なりしを以て一六〇三年女王の逝去と共にチャードル家絶え、スコットランド王ジェームス六世入りてイギリス王の位を継ぎ、ジェームス一世と稱しぬ。是をスチャード家の祖とすジェームス及子カロロ一世は常に王權神聖説Divine Right of Kingsを唱へ數議會を解散し殊に

カロロの如きは十餘年間議會を召集せずして任意に國政を處斷し、又國教制を勵行しければ清教徒は去りてアメリカに行き人心頗る恟々たり。

國會 會、スコットランドのプレスビテリアン教徒兵を擧げて反抗するあり、王は軍費の支出を得んと欲し一六四〇年議會を召集せしが議會は政府の失政を論じて止まざりしかば、直に之を解散し同年更に新議會を召集せり、然るに議會は依然として王命を奉せずカロロの兵力を以て議會に臨みければ人心の騰沸甚しく國內分れて勤王、議會の二黨となり互に兵を交へしが勤王軍は敵將オリベル・クロムウェルの破る所となり王も亦捕はれぬ。

王政顛覆

當時議會黨はプレスビテリアン及インデペン

クロムウェ

カロロ一世  
刑せらる

ンデントの二派となり、前者は王權を制限せんとし、後者は共和政治を布かんとし其争頗る激烈なりしが、インデペンデント派の首領クロムウェルは遂に武力を用ゐて反對黨を議會より逐ひ殘除の自黨議員を以て高等法院を組織し王を審判せしめ一六四九年之を死刑に處せり。

共和政治

かく英國は政體を一變して共和政治となり

クロムウェル其實權を握れり然るにアイルランド、スコットランド二國は故王の子カロロ二世を推して王位に即かしめんと企て、オランダも亦密に船舶を貸して助くる所ありしかば、クロムウェルはアイルランド、スコットランド兩國を平げ、カロロをフランスに逐ひ、又一六五一年航海條例を出して、オランダの商業上の利益を奪ひこれと戦ひて大勝を得た



り。  
クロムウエルは専制果斷を以て國民を威服し任意に議會の召集解散を行ひ舊教及王黨を抑壓し強硬を以て外交の方針となし、エリザベタ朝以來の盛境に進ましめぬ。

議會の二派

王政復古 一六五八年クロムウエル死し、子リチャード職を襲ぎ數月にして辭するや國民カロロ二世をフランスより迎へて王位に登らしめぬ、王放肆にして私行修まらず、ルイス十四世の賂を貪り其意を迎へて政を執りしかば、議會は頻に施政の失當を攻め或は審査律オーストラールを通過して舊教徒の官吏及議員となるを禁じ或は人身保護律ハベアス・コルポラテを議決して漫に人民を逮捕するを防遏せり、然るに王弟ジェームスの王位繼承權に關し議論二分し、進歩主義のホイッグ黨は之を削るべしと

論じ、保守主義のトーリー黨は之に反對し、トーリー黨遂に勝を制してジェームスを立てぬ、ジェームス二世是なり。

名譽革命

ジェームスは固く王權神聖説を信じ、熱心舊教の恢復を謀り、又ルイス十四世の賂を受けて常に其鼻息を伺ひしかば人民大に望を失ひ、一六八八年ジェームスの女マリアの夫オランジュ侯ウレム三世を迎ふウレムは銳意弊政を改め權利ライツ表白令ビレットを出して國民及議會の權利を明確ならしめ、ホイッグ黨の人士を登用して政黨内閣の端を開き又極力ルイス十四世の政策に反對を試みき。

第三章 イスパニア繼承の争

トルコとオーストリアとの關係 ホンガリアはウエスト

フリア條約により政教共に多少の自由を恢復せしが、ドイツ帝、レオポルド一世の新教徒を虐待すること甚しきに至り、數、叛旗を翻し一六八二年遂に救をトルコに求めぬ、是に於てトルコの大軍、ホンガリアを席卷し、翌年進みて、ウイーンを圍みしかば、ポーランド王シモン・ソビエスキはドイツ諸邦ベチナア等と相合してトルコ軍を撃退し、ホンガリア及トランシルワニアはオーストリアに歸しぬ。

### イスパニア繼承問題

イスパニア王カロロ二世嗣無かりければ女系の關係により、ルイス十四世は孫フリップをレオポルド一世は次子カロロを、又、バウリア侯エマヌエロは子フェルヂナンドを立てんと欲せり、然るにフェルヂナンドは夭折し、又イスパニア王は一七〇〇年死に臨み遺命して

領土全部をフリップに譲りしかば、位に即きてフリップ五世と稱しき。

是に於てイギリス、オランダ二國はイスパニア、フランスの合同により、ヨーロッパ國力の平均を破らんことを恐れ、ドイツ諸邦と共に皇帝を助けて各地に戦ひ、フランス軍連敗して將に和を請はんとせり、會、英國に於てはホイッグ黨内閣仆れ、トリーパー黨之に代りて平和を主張し、又ドイツに於てはレオポルドの長子ヨセフ一世歿して弟カロロ六世位を嗣きしかば、同盟諸國はイスパニア、ドイツの合併を憚り、局茲に一變し、一七一三年ユトレヒトに和議を媾じぬ。

ユトレヒト條約 條約によれば列國はイスパニア、フランス二國が永久合同せざるの約を以てフリップ五世の王位

を認め、イギリスはイスパニアよりシブラルタルを佛國よりニッポフ、ウンドランド、ノワスコナア、及ハドソン灣地方を得、オランダはイスパニア領ネーデルランドの數寨を得、ブランドンブルグはプロシア王國の稱號を承認せられ、サボヤは王國としてシチリアを得たり、翌年ドイツ帝も亦フランス王と和し、イスパニア領ネーデルランド、ミラノ、ナポリ、サルヂニアを領しぬ。

大ブリテン フランスはルイス十四世死して曾孫ルイス十五世位に登り、朝廷は豪奢腐敗を極めぬ是より先きイギリスはウルレム三世の歿後、義妹アンナ代り立ち、イギリス、ユットランド兩國を合せて大ブリテンを立て、國勢大に伸張し、文學にはポープ、アデソン、スウフト、デフォー等を出し

大ブリテンの隆昌

しぬ。一七一四年アンナ歿するや、ハンノフル選舉侯入りて王位を繼ぎ、シオルジ一世と稱せり。

四國同盟 一七一七年イスパニア王フェリポ五世は兵を出してサルヂニア及シチリアを占領せしかば、ドイツ帝、カロロ六世はイギリス、フランス、オランダ、三國と結びて之に抗し、其局イスパニアは一も得る所なく、ただサボヤ公が、シチリアとサルヂニアとを交換し、サルヂニア王と稱するに終れり。

### 第四章 北及東ヨーロッパ諸國の盛衰

#### 北ヨーロッパ戦争

ポーランド ポーランドはヤゲロ家の國王を奉ずるこ

と二百年、其間プロシアを屬國とし、又リウニアを略せしが  
一五七二年ヤグロ家絶えて選舉王國となりしより、王權地  
に墜ち貴族の專横甚しく、プロシアは獨立し、リウニアはス  
ウェーデンに奪はれ、亦如何ともする能はざりき。

ペテロ大帝

ロシアは一五三三年イバン四世位に即き、南はア  
ストラハンを略し、東はシベリアの侵略に着手したりしが  
其後内亂外寇交、至り後數世を経てペテロ大帝に至れり。  
ペテロはロシアが未だ良港を得ざるを慨し、一六九六年ト  
ルコよりアゾフを奪ひ、翌年親しくオランダ、イギリス諸國  
に遊び、造船術を修めしが、歸國後制度、風俗文物皆西歐の風  
に則り、陸海軍を整へ、學校を開き、工業を起し、又自らロシア  
ギリシア教會の長となり、政教の主權を一身に集めたり。

カローロ十一世

スウェーデン 三十年戦争以來スウェーデンは殆ど東海沿  
岸の地を領して北ヨーロッパの最強國となり、屢兵をポーラ  
ンド、デンマルクと交へしが一六六〇年カローロ十一世即位  
するに及び外はポーランドよりリウニアを奪ひスカンデ  
ナヴィア半島南部のデンマルク領を併せ内は王權の伸暢、行  
政の改革、軍備の擴張、財政の整理等に盡力し、子カローロ十二  
世の即位の當初國力頗る充實せり。

北ヨーロッパ戦争 時にサクソニア侯アウグスツス、ポー  
ランド王位にあり切にリウニアを恢復せんと欲し、デンマ  
ルク王フレデリキ四世はシッレスウヰヒを奪ふの志あり而  
してロシア帝ペテロも亦東海東岸の地を占領せんと欲し  
乃ち三國同盟してスウェーデンと戦端を開きぬ、是を北ヨー